大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

＊特集
装幀を考える

間村俊一 1
舟と装幀に関する覚書

鈴木　衛 10
「問い」の生まれる場所

木村公子 15
ある編集者の装丁事情

大矢靖之 21
装幀をめぐる問題系についての試論——書店・書店員の観点から

＊連載
中垣信夫 28
命の形—形の命 No. 09

大学出版部ニュース 30

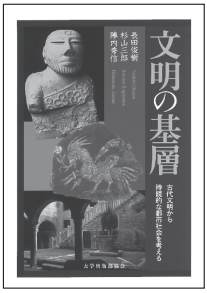
No. 108
2016. 10
秋

一般社団法人
大学出版部協会

大学出版部協会・ブックレット

大学出版部協会 発行／東京大学出版会 発売【2015年7月刊】

2014年5月に千代田区立日比谷図書文化館で開催された市民シンポジウム「文明の基層」（総合地球環境学研究所・京都大学学術出版会・大学出版部協会 主催／活字文化推進会議 後援）の内容をブックレット化しました。



長田俊樹　おさだとしき（総合地球環境学研究所名誉教授、神戸市外国語大学客員教授）
杉山三郎　すぎやまさぶろう（愛知県立大学大学院特任教授、アリゾナ州立大学人類学学部教授）
陣内秀信　じんないひでのぶ（法政大学デザイン工学部教授）

文明の基層

古代文明から持続的な都市社会を考える

A5 判・80 頁／定価（本体 1,200 円＋税）ISBN978-4-13-003152-3

古代都市のイメージは大きく変わりつつある。インダス文明の諸都市のゆるやかなネットワーク、中米の古代最大都市テオティワカンでの新しい発見。人はなぜ都市を作ってきたのか、その歴史的基層を中世ヨーロッパのヴェネツィアと比較しながら、改めて都市の魅力と未来への可能性を探る。大学出版部協会ブックレット第3弾。

〈主要目次〉

第一章　インダス文明：ネットワーク都市――中央集権的文明観を覆す（長田俊樹）
「大河文明」は本当か？―広大なインダス文明／インダス文字とインダス印章／草原の遺跡、海岸沿いの遺跡―大河から離れて／砂漠の遺跡の謎／「城塞」と「パスポート」―都市ネットワーク論に向けて／墓から見えるもの―格差の不在／砂丘が先か、文明が先か／インダス文明は大河文明ではなかった―農業と水害の視点／古代文明観を見直す―「穀物倉」と「アーリア人侵入説」／文明の衰退について考える／ゆるやかなネットワークの存在／都市社会をどう見るか―中央集権的文明観からの解放

第二章　新世界最大の古代都市テオティワカン：英知の集積としての都市（杉山三郎）
閉ざされた空間の多様性／文明の萌芽／認知能力＝知恵こそが、文明の基盤をなす／中規模都市ができ始める／完全計画都市、テオティワカン／多くの人を迎える巡礼地として／暦と数の体系／「太陽のピラミッド」と「月のピラミッド」の二元性／墓は語る／古代人の交流―物を集めるネットワーク／文明の確立から崩壊へ―伝わり、つながる文明の諸要素

第三章　水都ヴェネツィア：交易都市から文化都市へ（陣内秀信）
水と共生する町、ヴェネツィア／逆・中央集権的構造都市―複雑に交差する水と陸のネットワーク／都市を解読する／交易都市から文化都市へ／オリエント志向と柔軟性／分散的都市から統合的都市へ／なぜ都市に人が集まるか／城壁の無い町／都市モデル再考／川が結ぶネットワーク／水車の活用／考古学調査がヴェネツィアのイメージを変える／ヴェネツィアの食と産物のネットワーク／ラグーナは自然・環境・歴史の宝庫―文化都市から環境都市へ

特集＊装幀を考える

舟と装幀に関する覚書

間村俊一（装幀家）

大川を舟でゆくか。
ぼくを置いて先にいってしまう装幀という舟。
しかし、装幀などなんの役に立つというのか。
この河原で誰を待つか。草むらにしゃがむ女を待つか。向う岸をめざす舟を待つか。馬の糞が落ちている。

別に大仰なはなしではない。十人の装幀家がいれば十通りの装幀が成立する。どれが正解でもない。ひとつのテキストをどう装幀するか、十人十色である。装幀家はまずテキストに出会う。これに向きあって、具体物としての書物を夢想する。しかしその作業はすべからく表層をめぐるものでしかない。内実はテキストにあるのだから。昔から嫁に出す娘の花嫁衣装にたとえて善い着物（ぞべべ）を着して本を送り出してやりたいという言い方を聞いてきたが、それはまったくその通りであって、しょせん装幀とはいかに見映えよくテキストを飾って本として市場に送り出すか、それが装幀家の手腕なのである。十二単では重すぎるし、ケバい厚化粧のような装いも嫌だ。やはり涼しく、凛として、さりげないたたずまいであれば、それにこしたことはないと思って、三十数年本を装ってきた。

理論的に考えるたちではない。理詰めで考えるのは端から苦手である。こうだからこうなるということなどない。右脳だか、左脳だか、いつも片方しか使ってこなかった。だから装幀に関しての理路整然とした論考など書けるわけはない。不遜にも、いつの間にか装幀が出来上がっていたのである。

まず手を動かす。書名と著者名といくつかの書体で打ってもらった写植文字を束見本に張りつけているうちにデザインは決まる。ただそれだけである。写真のふさわしいときもあれば、図版、あるいはイラストがいい場合もある。しかし、いつも最終的には文字である。文字がすわれば、

図像もついてくる。ひっきょう書物はタイトル。タイトルの語感とイメージだけがたよりである。

書名のない書物はない（と思う）。装幀をはじめるにあたって二三日はタイトルを見て過ごす。書体を考える。明朝体かゴシック体か、あるいは楷書体。おおむね明朝を選択する。タイトルの抱える奥ゆき、ひろがり。それが腑に落ちると、後は向こうからやってくる。こういう写真、こういうオブジェ、あるいはこういう絵画、イラストレーション。図像はいつもタイトルにおびき出されるのである。こういうふうに書くと何も考えないで方向性が決まるようで申し訳ない（誰に対して？）のだが、実際そのとおりなのだからしょうがない。装幀の作業に要する期間はまちまちである。時間があればよいというのでもない。集中力はそんなに持続できないものである。二週間くらいで仕上げるというのが一番性に合っている。

いずれにしても装幀論などとはほど遠いところで作業してきた。論は苦手。以下は書物にまつわるいくつかの断章である。つまりは落語のマクラのようなもの。本篇などは知ったことではないのである。ご用心、ご用心。

〔紙〕

デザインの作業の一番後にくる（場合によっては紙から決めることもあるが……）。ぼくの場合、文字、レイアウトがすべて終わった後で用紙を決めることが多い。

用紙こそが着物（ベベ）である。これを間違えると大変。馬子にも衣装である。それでいて、え、こんな？　という服を着せることもある。

若者は若者らしく、老人は老人らしくなどと考えてはいけません。老人にこそケバいドレスを、若者にこそシブい着物を着せようじゃありませんか。馬の糞からとったバフン紙などというお下劣な名前の紙は老若男女いづれにも似合う、ジョーカーのような用紙でよく使います。つまり手ざわりですね。つるつるしているか、ざらざらしているか。いずれが今考えているテキストにふさわしいか。思い込みはいけません。まず疑って逆にして、また元にもどすという面倒臭い作業をくり返して、どこかに落ち着くのです。それが当たっているのか、はずれているのか。勘が頼りです。出来上がってきて本を手に取ってみた時の手ざわり。しっくりいっていればよかったなと思います。つまりは本はさわって初めてナンボのもんです。めくれよ、頁を。

〔本文組〕

オーソドックスに組まれたものが好きです。これでもか、これでもかといった変則的な文字組みは一瞬面白いですが、疲れます。つまり、読者の側に立ってみればわかります。いかに読みやすいデザインであるか。これに尽きます。敬愛する友人のモットーですが「本文組は編集者の領分。装幀者にはまかしたくない」。けだし名言です。活版組の長

い時間を経て成立した版面があります。昨今のＤＴＰのように、なんでもできると思ってもらっては困ります。自戒を込めて。本文書体は、小見出し、大見出しも含めて極力一書体、ゴシックも極力使用せず、太い書体も使用すべからず。もちろん、アミカケなどは言語道断です。使用する書体に対する美意識は、それぞれの装幀家が持ち合わせていなければなりません。やむなくリュウミンを使用するときは、カナはＫＯを使用するべきでしょう（蛇足）。モリサワと石井の書体の優劣に関しては、ここでは触れません（詮無いことです）、あゝ。

〔帯〕

腰巻は大事です。やはり人妻の締める赤いのが好みです。少し匂ってくるようなのが。日本の本独特なものでしょう。洋書にはほとんど見かけません。でも大事です。

まず帯をデザインしてその天地の幅を決めて、それからカバーのデザインに移ります。あんな余分なものはないような気もしますが、その余剰な存在が面白い。天地五十㎜くらいから、場合によっては二重のカバーのような幅広のものもあります。要は本体の宣伝です。かつて「腰巻大賞」なる立派な賞もありました。

宣伝ですから、帯のコピーは編集者さんが四苦八苦します。しかしここが腕の見せどころ。打ち合わせの席で、帯は後で入稿しますと言うような編集者は信用してはいけません。これから売っていこうとする本の決まり文句も書けないようでは、何をか言わんやです。内容もわからないで本を手に取る読者にとって、メトロポールの灯は、装幀と帯の惹句だけなのです。

〔図像〕

打ち合わせで「文字だけでお願いします」と言われるのがつらい。しかし過去、何百回となく言われてきて、その度になんとか文字だけでデザインしてきました。まあしょうがないですね。今も二、三冊、そのような要件を抱えて難儀しています。

図像があった方が楽です。つまり写真だったり、絵だったりを使うのが前提の場合、ある意味その絵柄に合わせてデザインしていけるからです。しかし干渉しあいつつ不干渉な関係性……。その場合も、図像とタイトル文字がいい加減に混在していてはいけない気がします。図像の主張とタイトル、つまり文字の主張が、互いに独立して存在していることが大事だと思います。溶け合っては、いけないのです。補ってもいけない気がします。図像と文字が緊迫感を持って共存すること。せめぎ合う銀河、つまり、ジョバンニとカンパネルラの関係性でしょうか。

〔活版印刷〕

鉛の活字は重い。コンピュータの画面に出てくる文字は、

文字という書体（最近はもっぱらフォントですね。フン！）であっても活字ではありません。

幸いにして僕は自分の句集を二冊、活版組、活版印刷で刊行できました。しかも旧漢字の活字を使用しました。書物とは物体、つまりオブジェです。手触りがあって、頁をめくり、紙の匂いを嗅ぎ、凹凸のある活字を賞でる存在ではありませんか。ボルヘスの、頁をめくってもめくってもついに同じ頁が現れない砂の本という究極の書物。活版印刷の文化は死に瀕しています。そのスピードの速いこと。御多分に洩れず、経済効率優先の流れです。そして電子書籍。スマートフォンの画面に浮上する電子文字を満員電車のつり革につかまって読む人々。われわれの背後に忍びよるのは誰か。鉛の活字を押すという物理的な力によって、薄い紙に刻印された文字を束ねて成立する書物がかつてありました。近い将来、テロリストのコーランさえも液晶画面に点る明かりの中にしか存在しなくなるのではないでしょうか。

〔函〕

最近なかなか見かけません。若い頃には普通に新刊書の何割かが函に収められていたものである。新潮社の純文学書き下ろし特別作品、安部公房や中上健次の本がなつかしい。この二、三年で、何冊の函入り本を装幀したことでしょう。

函とはカタツムリの殻、書物にとっての家のようなものでありましょうか。なくてもいいかもしれないが、切実にあった方が良いに決まっています。

〔表紙〕

表紙とはカバーを外した本体のことである。絢爛に飾ったカバーを外すと、表紙は何もデザインしていない本が多い昨今です。本のカバーを外すのも一つの行為であり、その先に予期せぬものが待ち構えていてほしいものである。

内輪話で恐縮ですが、表紙と別丁扉とどちらを二色刷りにするかと言われれば、まちがいなく表紙を二色にします。カバーをめくってやっと見えるそんなところに金をかけるのかと言われても、カバーは着物である。一枚脱がせて、その後にお楽しみが待っています。あっとおどろくおたまさん、であります。

よくカバーに使用した四色の図版を二色分解します。変にヒワイでそれでいて豪奢になるから驚きです。

予期せぬものが出てきた方が面白い！　計算通りは嫌なものです。すばらしい図版や写真を使ったからといって、すばらしいデザインにはなりません。こんな材料しかないのですかと担当編集者に泣きを入れながら、蠅のシルエットをコピーにとって、束見本の上に転がしているうちに、とんでもないデザインになったりしたことがありました。少し軸をずらして見ること。たいていのことはやり尽くさ

れているのだから、少しよそ見をすればいいのです。入稿してみて面白い作品が出てきたときの驚愕、色校正の醍醐味はここにあります。ＭＡＣなどという予見可能な手段はまっぴらごめんです。

〔俳句〕

俳句と装幀は似ているか。ぼく自身俳句もやりますのでよく聞かれる質問です。よく似ています。そぎ落とすのです。一句に季語が二つあるのを季重なりと言って、俳句では嫌いますが装幀も同じです。

カバーの表に二つの要素はダメ。一つに絞りましょう。焦点は一つです。タイトルと図像。図像は二つではいけない。写真であれ、図版であれ、二点使用するとだいたい失敗します。あれも、これも、はダメなのです。

人妻の乱れた着物の裾に向かってフォーカスを当てて、一点で仕留めましょう。しかしまれに蕪村のように、焦点が二つ存在する俳人もいます。むずかしい。芭蕉は大概一点でしょうか。蓑を欲しがる猿。飛び込む蛙。すっきりしたデザインです。

本という煉獄にあり雨蛙

〔奥付〕

あまり自分でやってしまうと出版社の色を決めてしまうような気がします。多少ダサくても、口出しすべきではないでしょう。

〔目次〕

目次を見ると本の内容が解ると言います。整然とレイアウトされた目次は美しい。というか、目次は美しくないといけない。当たり前です。多くの読者は目次をまず見て、その本の購入の是非を判断する。しかし煩雑な目次もある。指定が大変です。もっと整理してくれと言いたくなる。なるべくこういうのは敏腕な編集者に任せたいと思うのですが、そうもいきません。目次は計算である。しかも美しい計算。

〔ノンブル〕

ベニスライトフェースかガラモンド。ま、その時の気分次第。でもベニスライトフェースかな。しかも０、００を頭につけて三桁にする。

〔柱〕

柱は何を支えるのか。なるべく崩れそうなところへ置いてみたい。三橋敏雄の句に「いつせいに柱の燃ゆる都かな」という句がありますが、書物も柱も燃えるとして、その場合はタテか、ヨコか。タテだろうな、きっと。

〔扉〕

あまり凝らないようにしています。別丁扉（本文用紙と別の紙を使用して見返しの次に挿む扉）はいかがなものでしょうか。慣例だから従いますが、本来は洋書のように遊び頁（おおむね白紙）を一枚置いて本文の三頁目に扉がくるのが一番しっくりきます。つまり本文扉です。この場合は二色刷り、本文用紙も少々奮発したいものです。

〔見返し〕

表紙と本文をつなぐ、重要な装幀アイテムである。印刷されたり、されなかったりするにもかかわらず、本全体のオブジェ感を引き締めて余りあります。ときどき天使の指紋がついていたりするから不思議です。

見返しに天使の指紋初しぐれ

〔版下〕

三十数年版下で装幀してきた。コンピュータは使わない（使えない？）。いわゆる紙の台紙に手動写植で印字した文字を貼りつけ、トレーシングペーパーをかけた上からサインペンで指定をする。さすがに版下で入稿する装幀家はぼくぐらいになってしまい、始めて版下を見ましたという若い編集者も多い。カッターナイフや定規を使って切ったり貼ったりする作業は、工作の授業のようで好きである。しかしいよいよ印画紙もなくなり手動写植が駄目になった。そろそろＭＡＣの助けを借りなければならないらしい。

版下と一緒に本も滅びるのだろう。この国の行く末と同じである。ジョバンニは活字工であった。いまもどこかの隣町で一文字ずつ活字をひろっているかもしれない老いたるジョバンニ。スマートフォンを操り『銀河鉄道の夜』を読む若者たちよ、絶滅の形態としての書物を想起せよ。

初夏の版下あはれ書物果つ

〔蛇足〕

哲学書、歴史書、文芸書、あるいはエッセイ集、コミック等々。装幀とはそれぞれの読者に向けて、それぞれの趣向に合わせて本を作る行為である。テキストが示唆する方向にふさわしい装いを付加すること。本のポジションを誤たないことが大事であり、装幀者の自己主張などは、さしはさむべきではありません。あくまで寄り添う存在である、装幀者は。

皮膚としての水。めくっても何も残らない、表装としての装幀。つまり手にした途端に何の痕跡も残さず、ただ書物だけが成立している手わざ、それこそが理想とする装幀のスキルではないでしょうか。

引っかかるのもよくない。つまずいてもダメである。痕跡を残すな。装幀者の思い入れや過度な主張を消し去るこ

と。書物はだれのものでもない。著者？　編集者？　装幀家？　書店の棚にひっそりと差されて読者を待つ書物は、だれにも帰属することなく、しかし誰かを待ってそこにひっそりと佇んでいる。だれのものなのか？　何がしかの対価を支払ってその書物を買って、頁をめくる読者のために、そのささやかな紙とのりと、インクでできたオブジェは、自ずからの存在理由をささやかに主張している。

本閉ざし父と子われに天の川

父という不毛の存在。書物もまた不毛である。製本された頁を次々とめくる行為の果てには何の生産的な実践もない。書物とはついに父性原理を体現した、アンチ生殖たるものの極北、すなわち役に立たない存在の最たるものの謂である。

装幀、この不毛なる行為を嘉したいと思うこと頻りである。

〔花布〕

本文と表紙の背をつないで強化するパーツ。紙で出来上がった書物に唯一布の痕跡が美しい（もっとも昔は布クロスの表紙が当たり前であったが……）。背の頭と尻に覗く可憐な布の色を選び仕損なってはいけない。これまでの装幀作業が一気に水泡に帰します。

明治生まれの父は、帽子が好きだった。しかもハンチング、鳥打帽である。さして大きな身体でない、頭にちょこんと乗せられたそれは、花布という本の背の頭に見え隠れする布の半端な切れ端に似ていた。出雲へ向う山陰線の蒸気機関車の窓からそのハンチングを飛ばしてしまった父は、照れ笑いを浮かべて言い訳したものだ。その顔色はうすいピンクに上気していたような気がする。花布の色は儚い色がふさわしい。

車窓より失せし帽子や春疾風

◆「使い古し」の時代とは。二〇一五年ノーベル文学賞作家最新作！

セカンドハンドの時代

―「赤い国」を生きた人びと

スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ／松本妙子 訳

© Margarita Kabakova

ソ連がなにを残したか探るため旧ソ連に暮らす一般の人びとに取材をおこない、二一世紀に甦りつつある抑圧的な国家の姿をとらえた大著。

四六判・本体2700円

岩波現代文庫

戦争は女の顔をしていない
スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ／三浦みどり 訳
（解説＝澤地久枝）本体1340円

ボタン穴から見た戦争
―白ロシアの子供たちの証言
スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ／三浦みどり 訳
（解説＝沼野充義）本体1160円

チェルノブイリの祈り
―未来の物語
スヴェトラーナ・アレクシエーヒッチ／松本妙子 訳
（解説＝広河隆一）本体1040円

岩波書店
東京・千代田・一ツ橋
（定価は表示価格＋税）
http://www.iwanami.co.jp/

〔スピーン〕

しおり、である。どこまで読んだかの目安に頁に挟む細い紐。こういうパーツとしての存在が本を本たらしめているとも言える。大方の文庫には経費削減のため付いてないが唯一新潮文庫には、こげ茶のスピーンが挟まっている。もって瞑すべし。

〔結論めいたいいわけ〕

女が来る。しどけた着物の裾を払って、草むらにしゃがむ。まだ日は長い。ゆまりの音が聞こえる。きれぎれに、ながながと。懐から紙を出し、あてる。すこし匂う。中天に雲雀の声がする。本は打ち捨てられたまま、河原にある。水を含んで、本文が膨らみ始める。湯気がたっている。本は重い。

初蝶来てゆまり長し長しといふ

嘘だ。すべて嘘である、蝶一頭は活字のように重い。ゆまりの池にとまる。このゆまりこそが装幀である。ゆまりのような装幀、装幀のようなゆまり。舟が来る。

もう一度言う。本は誰のものでもない。テクストは著者に帰属するかもしれないが、物体としての書物が成立するとき、本は全ての関係性の間に宙吊りになる。テクストがあり、そのテクストを整えた編集者がいる。著者、編集者、装幀者、その三位一体が完成したところに本は出現する。さらに、印刷に携わる人たちがいる。製本を担当する人たちのことを無視して本は成立しない。すべての人たちの本。本はひとりのものではない。著者のものでも、編集者のものでも、いわんや装幀家のものでもない。紙、インク、人々の流す汗、それらの結晶が一冊の本となって成立する。物質であり、物体である。オブジェとしての書物。どんな本であれ、テーブルに置いたとき本は立つのである。スマートフォンの仮想空間に点滅する情報としての電子書籍ではない。匂いがあり、手触りがあり、時間と歴史が蓄積されている。

女の、男の、父や母の、すべての人々ののっぴきならない生き様の果てに成立する一冊。それを書物という。ゆまりである。匂いのない本など、ごめんである。

編集者と打ち合わせで蕩尽した酒の量が、本をツヤツヤとさせる。打ち合わせの度に酒を飲む。いつも同じ店である。時には店主とも、いろいろ意見を交換する。当たり前である。その店主こそが、まず最初の読者であるかもしれないのだから。

酒ばかり飲んで来た。しかし酒も飲まずにどんな本が装幀できただろうか。宮澤賢治全集、江戸川乱歩全集、中原中也全集、……。全集ばかりではない。ギリギリ間に合った種村季弘さん、加藤郁乎さん、松山俊太郎さんたちの本、皆さんと豪勢な酒席を共にできた。いい酒があってこそ、

いい本があった（ような気がする）、すこし弱気だが。今どき無頼を気取る気もないが、酒も入らない本など、信用できない（できなくはないか）。やはり弱気だ。

装幀などいかほどのことでもない（と思う）。職人さんであればいいと思ってここまで来た。

また今宵もめげずに抜弁天からゴールデン街へ繰り出そう。ナオ、開いてるか！　本をつまみに一杯やろう。ナベさんはわが行きつけのゴールデン街の老舗である。ときどきボルヘスの訳者とも遭遇する。

箸ぶくろ栞がはりに春の本

〔蛇足の蛇足〕

また酒の話で恐縮。

良い編集者のもとでこそ、良い本ができる。当たり前の話である。これに尽きる。装幀者は編集者とつるんで本をつくる。一心同体である。優秀な編集者にかかると、良い本ができる（イコール、売れる本ではない）。やはり共にする酒席の数であろうか。良い本はいい酒の匂いがする（と思う）。

最後にフランケンシュタインのこと。

イギリス・ローマン派の詩人たち四人（バイロン、シェリー、メアリー・シェリー、キーツ）が集まった夜、シェリー夫人によって呪われたフランケンシュタインは誕生した。本とはなんであるか。余剰であり、誰からも祝福されない、異形のものである。怪物である。そんなものに懸想して何になるか。そう思いつつ、かけがえのない一冊を求める旅はこれからも続く。呪われた怪物としての本。

メアリー・シェリーその夜のこと雷のこと

匂いのある本を残したい。版下はもー吉に置いておく。安倍さんもう一軒いこう。

菊正の樽しみじみと梅雨に入る

本当にこれが最後である。

ニューヨークの場末でゴミのような写真や、オブジェを拾って箱をつくったジョセフ・コーネルよ。不毛な箱としての世界。その箱こそが、いま問われるべき書物ではないだろうか。箱としての書物。書物としての箱。舟としての装幀。ゆく先はさだかではない。馬の糞が落ちている。

特集＊装幀を考える

「問い」の生まれる場所

鈴木衛（装幀家　HP：mamozuan.com）

「装幀」を「学術書の側」からあるいは「学術書の装幀」というくくりで、何か書いて欲しいという依頼を受けて正直戸惑っている。そうか「学術書の装幀」という区分けがあったのか……と。私自身は本をジャンルに分けて考えて来なかったし、あるジャンルに特化して接するタイプではない。興味を持ったものは何でも読んできたので読書好というより、いつも知りたいこと、分かりたいことがあって、何にでも手を出す乱読タイプだからだ。だからこのお題に対しては「私、学術書の味方です」と肩を組むようにものを言うことが出来ない。

まず「学術書」という言葉に抵抗がある。「術」が好きではない。「芸術」「医術」「美術」……「剣術」「忍術」と人を寄せ付けない言葉である。「術を解いて欲しいなぁ」と思っている。良い本は堂々と書店の表の平台にのって欲しいのだ。このように本を平たく見ている人間だから「学術書の装幀というのは～」という語りができないのだ。

だからこの機会は改めて「学術書を読むということ」を一読者として考えることから始めようと思う。そもそも装幀家とはいえその立ち位置は実作者（著者・編集者・版元など）ではなく、かといって受け取る側（読者）でもなく、軸足の定まらない宙づり状態と言ってよい。だから今回は立ち位置を定めず軸足を入れ変えながら学術書にどう触れているのかや、どう伝えるのかを考えてみたい。身勝手な棒振りをするかも知れないし、足を踏み外すかも知れないが……。

では「学術書」は誰がどのように読んでいるのだろう？シンプルに考えられるのが、研究者。著者に近い立場の人達で、次は学生達。また社会人でもその道の学びが求められている人達。これらの人達は著者の研究成果をそっくり受け止める（られる）人達だろう。いわばWinWinの関係

である。先人が組み立てた体型的学問を分析し、咀嚼して腑に落としてゆく。さらには自分の研究や仕事に役立てることが出来る基礎知識の豊富な人で「目的達成型のプロ読み」の人達と言える。「分かる」ことが最低目標で「分かったこと」を量的にも質的にも評価しあえる関係である。

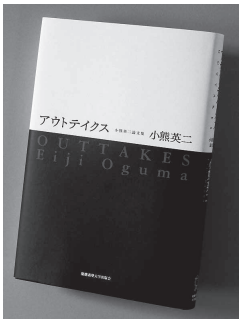
もう一方の裾野には私のような一般の読者がいる。その多くは自分の興味をより深めて人生を少しでも豊かにしたいと学ぶ人達だ。この読者は研究者の「分かった」「分かっている」を前にして行儀良く「分かりました」「ご馳走様」というわけにはいかない。内容の正しい理解には到達できなくても、共振する言葉や考えを見つけたらワクワクしながらそれを楽しむ人達ではないだろうか。こういう読書には明確な目的が設定されていないから満足の限度に限りがない。参考文献を漁っているあいだに別の何かを発見して寄り道をしたりする。そして「もっと知りたい」が増えていく。

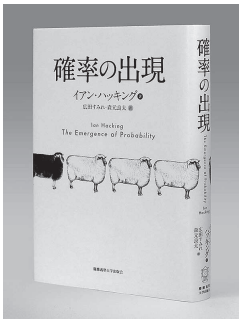
人は何かが「分かる」と「分からない」も増えていくものだと思う。私は「装幀」のことを一般の人より「分かっている」が一般の人より「分からない・知らない」が増大していてもっと「分かりたい」と思っている状態だ。つまり、「分かる」と「分からない」の両極を持ったモーターと同じと思って良い。これは仕事が面白くなっていったり人間関係が深まっていく過程に似ている。

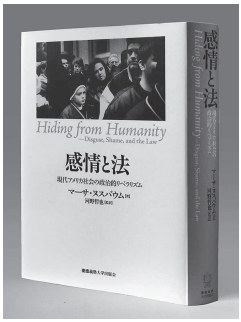
プロ読みの場合は達成目標に早く到達して「分かった」で止めて、次の「分からない」に移行したいのだが、右記のようなワクワクも少なからず含まれていると思う。

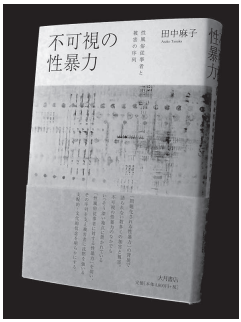
では「分からない」けど「ワクワクする」状態になるときどんなメカニズムが働いているのだろう？　この辺について、大江健三郎は若者向けの著書の中で、シクロフスキーの言葉を引用している。

《〜〜芸術の目的は「認知」すなわちそれを認め知ることではなく、「明視」することとしてものを感じさせることである。また芸術の手法は、ものを「自動化」の状









態から引き出す「異化」の手法であり、知覚を難しく、長引かせる難渋な形式の手法のことである。
これは芸術の手法においては知覚の過程そのものが目的であり、したがってこの過程を長引かせる必要があるためである。》（岩波新書「新しい文学のために」）

ここでは「認知」することではなく「明視」することが重要だとしている。受け入れるように「知る」ことでなく自ら前のめりになって、目をくっきり開いて「視る」ことがリアリティをともなった知覚なのだと言っているように受け取れる。むずかしいと感じていても「もう引き下がらないぞ」と戦闘モードになっているのだ。

では、前のめりになって「明視」するにはどんな方法があるのだろうか。ただお目々をぱっちりあけて睨めばいいわけじゃないだろう。大江健三郎はG・バシュラールの言葉を引用して想像力の重要性を仄めかしている。

《今でも人々は想像力とはイメージを形成する能力だとしている。ところが想像力とはむしろ知覚によって提供されたイメージを歪形させる能力であり、それは分けても基本的なイメージからわれわれを開放し、イメージを変える能力なのだ。イメージの変化、イメージの思いがけない結合がなければ、想像力はなく、想像するという行動はない。もし眼前にあるイメージがそこにないイメージを考えさせなければ、もしきっかけとなるイメージが逃れていく夥しいイメージを、イメージの爆発を決定しなければ、想像力はない。知覚があり、ある知覚の追憶、慣れ親しんだ記憶、色彩や形体の記憶がある。想像力に対する語はImageではなく想像的なものImaginaireである。あるイメージの価値は創造的なものの後光の広がりによって測られる。（中略）人間の心象に於いては想像力はまさに開示の経験であり、新しさの経験に他ならぬ。〜》

ここでは想像力とは、知覚したものから既成のイメージを呼び出すものではない。そこから逃れて、自分で新しい体験をつくることだとしているのではないか。流通した想像の産物を受け取るのでなく自分の中で再生産するものだということじゃないかと思う。その素材になるものは想像されたモノが産声を上げた時に背後に生まれた光りのようなものかもしれない。つんのめりそうになりながら、消えて行こうとする光りを追いかける時に、脳の回転速度は最高速になるのじゃないか。自分が共感したり、心を動かされる考えに出会った時には喜んでばかりいないで、転倒、スピン、クラッシュ覚悟でその考えの誕生の秘密を追いかけろということだろう。

ここまで考えてみて、やっと自分が仕事の現場で苦心していることが言葉になりそうだ。端的に言えば、意味を与えるのでなく、食い付かせることだ。読者の手をやさしく引くのではなく、その重心に揺さぶりをかけることだ。そしてお互いにのっぴきならない緊張状態をつくることだと思う。「こいつ何者?」と思わせることだ。何しろ読者は認知の回路に横道が沢山あるのが好きだから。

そのためには、まず言葉（書名）を意味が集まった記号のままにしないことだ。読者は書名を頼りに本を手にするのだから何が書かれているのかがすぐ「分かる」ことが最重要だ。しかしそこに「分からない」が含まれていれば、あるいは表さなかったことがまだあるよ。というように見えればより興味は深くなる。そのために書体を選び見せ方を工夫する。どんな書体でどんな大きさ・字間にするのかが大切だ。私は書名を著者の声（遠回りして言えば読者の声）として捉えている。日本人は黙読する時に、視覚野と聴覚野を同時に動かしているという。見ながら聴いているというわけだ。その声が魅力的でやさしいのか、力強く大きいのか、様々な演出ができる。字間はその声が流ちょうなのか、たどたどしくても誠実な発語なのかを表現できる。それだけでも装幀は成立してしまう。

これは言葉＝意味という自動化を迂回するとても大切な方法と思っている。

さらに意味を別のイメージを並置することで新しい想像力のモーターを回すことだ。

図像と書名はお互いにモンタージュの関係をつくる。図像は言葉を言葉は図像をお互いに異化して新しい想像力を喚起することが可能だ。ピカソの「ゲルニカ」を子どもに見せたときに返ってきた言葉は「わからないけど面白い」だった。大抵の大人は「面白い」とは思わない。戦争を表現していることを知っているからだ。ピカソは戦争に新しいイメージを与えて、私達に戦争の分らなさをずっと考え続けさせている。彼はこんなことも言っている。「写真は

近代を知る、今がわかる。
政治の動きを中心に、時代の流れを平易に描く本格的通史！

日本近代の歴史 全6巻

9月刊行開始！『内容案内』送呈
〈企画編集委員〉大日方純夫・源川真希

❶維新と開化
奥田晴樹著　国制はいかに刷新されたのか？（第1回）２８００円

〈続刊書目〉毎月１冊ずつ配本予定
❷「主権国家」成立の内と外……大日方純夫著
❸日清・日露戦争と帝国日本……飯塚一幸著
❹国際化時代「大正日本」……櫻井良樹著
❺戦争とファシズムの時代へ……河島　真著
❻総力戦のなかの日本政治……源川真希著

進む歴史研究、変わる教科書記述
あなたが中学・高校で学んだ日本史は過去のもの？【2刷】

ここまで変わった日本史教科書
高橋秀樹・三谷芳幸・村瀬信一著
記述の変化と根拠となる研究の進展を教科書の専門家が解説。Q&Aなどの付録も充実。１８００円

大学でまなぶ日本の歴史
木村茂光・小山俊樹・戸部良一・深谷幸治編　１９００円【2刷】
「暗記する日本史」から「考える日本史」へ―。高校教科書とはちがう新たな「日本史」との出会い。

平安時代記録語集成
上巻／下巻 附 記録語解義
峰岸　明著　国語学の権威が蒐集した、平安時代の日記に使用されたことば〈記録語〉約３万を集成。
各３４０００円　『内容案内』送呈

吉川弘文館
〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151／価格は税別

丁度良いときにやって来て、絵画をあらゆる文字や逸話や主題から解放したのだ」と、絵画が絵解き役から解放された。説明役を脱して絵画そのものに向かえる。としている。「ゲルニカ」は純粋絵画と「戦争」という言葉のモンタージュだと言え、悲惨な戦場写真よりもずっと長く戦争の意味について考え続けさせている。また、「芸術は爆発だ」の一言によって岡本太郎の作品を見るものは、ずっと芸術の意味を考えている。モンタージュによって「戦争」や「芸術」はその意味を問い直すきっかけになったのだ。

著者は書名が一つの投げ出された「問い」になることを求めているのではないだろうか。読み終わった後も読者の中でずっと生き続けることを望んでいるのだと思う。

本のカバーは意味が視覚的なイメージを借りて「問い」が生まれる場所なのではないか。一人芝居の小さな舞台に例えることができそうだ。そこに登場する書名は、著者が積み重ねた複雑な文脈から選び抜かれ、多くの意味を背負わされて舞台に押し出されている。台詞を丸暗記しただけの初舞台なのだ。自分の中に意味がリアルに生きていない新人役者だ。観客を釘付けにする演技などできるわけがない。初日までに大急ぎで演技指導しなければならない。そこでは、発声から始めて身振りや衣装の着こなしまで、さらには舞台装置まで考案する。それは私達においてはタイポグラフィであり、色彩構成・図像選びなのだ。こうして新人役者が台詞を自分事として肉体化したとき、初めて舞台と客席が一つのホリゾントで結ばれる。役者を先頭に舞台を踏み出し客席に腰を据えて、観客と一緒に日常を明視する一座になるのだ。観客は芝居の筋など憶えなくても良い。ぞくぞくした台詞や場面のイメージを持ち帰ってずっとその意味を考えて欲しいのだ。そういう観客はまた次の舞台を見に来てくれる。自分なりの回答を持って。そしてまた新しい問いを持ち帰るのだ。

学術書というものが、本の世界である定位置を占めているとしたら、そこから半歩重心をずらすことが必要じゃないだろうか。自ら異化して、読者と一緒に前のめりになることじゃないかと、一読者として望んでいるし、装幀する立場としては読者を長い思考に導くことをしなくてはいけないと改めて思っている。

本を読むということは、数万平方センチに及ぶ深い鍾乳洞のような空間で、そこに散りばめられた僅か三ミリ角の文字を拾い集める孤独な旅のようなものだ。

装幀はその入り口にあって読者を招き入れるのだが、私は、創造物が産まれた時の光りを、本と読者の間から逆照射して照らしたいと思っている。

特集＊装幀を考える

ある編集者の装丁事情

木村公子（武蔵野美術大学出版局）

装丁で振り返る一五年

「教科書なのに、お洒落ですね」と、お褒めいただくことがある。どうやらこれはカバーを指してのことらしい。まずは武蔵野美術大学通信教育課程、教科書制作の舞台裏に御案内したい。

教科書の納品は毎年二月末日。三人の編集者が同時進行で五冊ほど制作しており、師走はじめにタイトルが確定、カバーに使える図版の有無や、束幅がわかるのは年の瀬も近い頃になる。当然、デザイナーとの打合せは年明け早々、まだ松の内である。一週間後にラフデザインを受け取り、一月末には印刷所に入稿というスケジュールだ。

しかも、教科書は紙材が確定しており（その理由は右の進行にある）、カバーはＯＫトップコートプラス（四色刷）、帯はＯＫマットカードＮ（一色）、色上質の見返しは科目ごとに色指定あり、造本は並製、という廉価ヴァージョンなのだ。

カバーに使用できる写真やイラストレーションがある場合はまだ救いがある。しかし、素材はあっても使用料が高額であったり、その書籍の内容を象徴するとは思えなかったりで使えないこともある。年明け早々、憔悴しきった顔の編集者に「ほんとうに、何もないんです」と言われるデザイナーの気持ちを考えると申し訳なくなる。

二〇〇二年四月、弊社は四六冊の教科書を同時刊行し、出版社としてのスタートをきった。表紙は山口信博さんによるデザインで、カバー、帯はなかった。現在でも、通信教育課程の学生の皆さんへは、第四種郵便のルールで、表紙に記された「文部科学省認可通信教育」の文字が見えるようカバーなしの状態で教科書が配布されており、表紙にもＰＰ加工を施しているのはこうした理由からだ。

二年後、取次を通しての販売を機に、既刊書二十数冊にカバーをかけることになった。カバーデザインは工藤強勝さん。つまり、表紙とカバーのデザイナーは異なっている。工藤さんは教科書としてのシリーズ感を重視して、どのような内容にも対応できるよう、表一と表四の矩形にそれぞれの科目に相応しい図版を入れる形式を考案してくださった。現在稼働している一一七タイトルのうち五八冊のカバーが工藤さんによる。教科書以外の装丁もあり、その総数は、品切れと表示している旧版も含むと七〇を超える。

約一〇年間、工藤さんの教科書シリーズがつづいたが、シリーズ感ではなく、個々の訴求力がほしいという営業担当者からの強い要望があり、一新することになった。二〇一四年以降、教科書のカバーデザインは、臼井新太郎さん、寺井恵司さん、馬面俊之さんのお三方を中心に依頼している。スケジュールも、予算も、こんなにタイトな依頼をどなたにすべきか、さんざん悩んだ結果、「本学出身のデザイナーしかいない」というわけで、このお三方となった。

教職系教科書を臼井さんに依頼したいと思ったのは、心理学など専門性の高い書籍を軽やかで、あたたかな装丁に仕上げておられるのを拝見したからだ。面識はなかったが、メールでコンタクトをとって快諾を得た。寺井さんは後述するが、以前からお付き合いがあり、馬面さんは本学美術館・図書館の図録をたくさん手がけておられ、美術系教員の信頼がたいそう篤いと聞き、ぜひにもと頼み込んだ。

もちろん、教科書以外の書籍も少しずつ手がけており、造本装丁コンクールに入賞した書名とデザイナー名を列記すると（敬称略）、寺山祐策編『エル・リシツキー　構成者のヴィジョン』（寺山祐策）、白石美雪著『ジョン・ケージ　混沌ではなくアナーキー』（寺井恵司）、森山明子著『石元泰博―写真という思考』（杉浦康平＋佐藤篤司）の三冊があり、向井周太郎著『デザイン学　思索のコンステレーション』（板東孝明）は一〇年に竹尾賞優秀賞を受賞した。

それにしても、「いいね！」とお褒めいただくようになったのはここ数年のことで、その歴史の浅さ、その数の少なさから、「大学出版」で編集者の立場から装丁を語るなどおこがましいにも程がある。さらには受賞図書に限って言えば、著者がデザイナーを連れて来てくださった。こうした環境は「羨ましい」と妬みを買うだけであろう。

弊社の刊行物は、著者が本学の教員もしくは関わりのある方々であり、その内容もアートが中心である。この記事はそんな特殊な版元の一事例にすぎないことを読者の皆様に、あらかじめお断りしておかねばならない。

デザイナーにどのように依頼するか

本来、書籍は編集者が企画立案し、著者にそれを執筆していただくために、いかにこの企画が素晴らしいか、どれだけの読者が待っていることか、これを書けるのはあなたしかいない、と熱心に著者を口説くはずだ。同等の情熱を

もって、編集者は企画を通すためのプレゼンテーションを社内で行うだろう。しかし、教科書にそれはない。著者はあらかじめ決まっている。その内容も、著者が行う授業が中心である。ゆえに、教科書に関して編集者が最初に、熱心に内容を語る相手は、デザイナーになる。

読者対象はだれか、著者はその読者に何を伝えたいと思っているのか、そのためにどのような方法を用いて、どのような構成になっているか。内容のみならず文体から人柄、経歴まで説明することもある。ここで私は、自分がどのようにしたいかは言わず（あまりにも切羽詰まっていて装丁どころではないのが正直なところだ）、「それで、どうしたらいいでしょう？」と毎回、デザイナーにすがりついている。その典型が今春の新刊、清水恒平著『マルチメディアを考える』（A5判、九六頁）であった。

「これは清水先生のデビュー作、清水先生は若手の著者で、デザインシステムコース三年生の専門科目の教科書ながら〈ですます〉調のやさしい語り口は清水先生のお人柄がよく現れており、一九八五年以降現在までのデザイナーにとってのメディア環境の歴史が概説され、註が充実している縦書きの脚注方式。歴史をたどりつつ次世代のデザイナーは何をすべきかを考えようという内容なのだけれども、装丁に使えそうな図版はない、もうどうしたらいいのか私はわからない」とデザイナーの寺井さんに訴えた（と思う）。その際には、必ずゲラをお見せしながら説明している。

デザイナーにとって、ゲラは必ずしも必要ではないらしい。しかし、編集者にとっては、手元のゲラがすべてなのだ（そうでしょう？）。ありったけの素材をもって、ありったけの情熱をもって語らねばならない。

毎度のことながら、ゲラを手にして混濁した編集者を前に、デザイナーはニコニコしながら（内心「またか」と思いつつ）、「やってみます」。一週間後にメール添付で届いたデザイン案には文字通り、息をのんだ。余白たっぷりの白地に空色の爽やかな帯、ジャック（コネクタの差し込み口）をモチーフに、写植を思わせるタイトル文字。著者名はゴ

ザ・ピープル
イギリス労働者階級の盛衰

トッド　福祉先進国から新自由主義先進国へ。1910–2015年、等身大の労働者群像で綴るイギリス現代史。**近藤康裕訳 ¥6800**

精神医学歴史事典

ショーター　精神医学の総体を知るために書かれた初の歴史事典。時代や地域を越え関連する211項目。**江口・大前監訳 ¥9000**

ユング 夢分析論

ユング「夢の本質について」「夢の分析」「象徴と夢解釈」など臨床家ユングの真骨頂を印す6篇。**横山博監訳 大塚紳一郎訳 ¥3400**

ミクロストリアと世界史
歴史家の仕事について

ギンズブルグ　些細に見える事例研究から何が見えてくるか。歴史学を牽引してきた著者の今の仕事7篇。**上村忠男編訳 ¥4200**

明治知識人としての内村鑑三
その批判精神と普遍主義の展開

柴田真希都　サイード、バンダ等西洋知識人論を装置として、人類普遍の倫理的価値を追求した批判的活動の総体に迫る。**¥7500**

ヘンリー・ソロー 野生の学舎

今福龍太　歩くこと、孤独、自然。文明社会のなかで真に自由な生き方を考え抜いたソロー。生誕200年、その根源に迫る。**¥3800**

若き科学者へ［新版］

メダワー　金言の宝庫として世界の科学者・研究者に世紀を超え愛読され続ける不朽の名著。**鎮目恭夫訳　結城浩解説 ¥2700**

msz
東京文京本郷5丁目32-21　みすず書房
tel. 3814-0131 fax 3818-6435（税別）
http://www.msz.co.jp

シック、英文タイトルもサンセリフ、参りました。

図版は、上が寺井さんによる帯付きのカバー。下は、通信教育課程デザイン情報学科、白尾隆太郎教授による表紙。二〇〇九年以降、表紙は白尾先生にお願いしている。四系統の科目を色で分けた表紙は、ペールトーンに白い幾何学形態が浮かびあがっており、同じ色でも幾何学形態の見え方が一冊ずつ微妙に違う。ずらりと書架に並ぶと、カバーなしでもかなりの迫力で、満足感が得られるようになっている。

著者の意向はどこまで反映すべきか

近年、装丁のラフデザインはメール添付のｐｄｆでいただくことが多い。ここですぐ著者にメールを転送しないほうがよい、と私は思っている。パソコンの画面でラフを見て、仕上がりが想像できるような著者はまずいないからだ。できることならば等倍でプリントして、それを持って著者に会いに行ったほうがよい。

ラフが出た時点で、デザイナーに根本的な修正を要求することは、私の場合はほとんどない（つもりだ）。著者に意向があるならば、編集者は最初のプレゼンでそれをデザイナーに強調しなければならない。その結果、デザイナーからいくつかの案が出されたら、著者に「どの案がいいですか」と問い合わせることはある。しかし「ちょっと修正してほしい」といった依頼は、たいていうまくいかないことをここで強調したい。ぐちゃぐちゃ言えば、ぐちゃぐちゃの仕上がりになることは間違いない。繰り返すが、言いたいことがあるならば、ゲラを前にしている最初のプレゼンで話すべきだ。これは鉄則である。好みの問題ではなく、デザイナーが明らかに文脈を読み違えているような場合はゼロからやり直さねばならないが、そんな事態になったら編集者は自らのプレゼンが悪かったのだと、著者にもデザイナーにも陳謝しなければならないだろう。

装丁を依頼する際には、タイトルや著者名、ＩＳＢＮコード等のデータをデザイナーに渡すのは当然だが、同時に帯の文言も揃えておかねばならない。毎回、苦悶するのだが、帯はたいそう難しい。担当編集者ならば帯の文言くらいスラスラ出るだろうと言われそうだが、実際には本づくりの佳境にあり、宣伝文句まで気が回らないような状況にある。そうした中で、ｗｅｂサイト告知の文章、書店向けの告知など、六二字、一五〇字、二〇〇字など各種の宣伝文提出を営業担当から求められているのが現状だ。

帯の文言はでき次第、著者にメールで相談するが、ずるい手段としては（甘えられる著者には）「帯の文言はどうしましょう」と著者に書いていただくこともある。そのままではなく、少しアレンジを加えさせていただくが、この方法はうまくいくことが多いように思っている。

内側のデザイン・外側のデザイン

A5正寸、タテ組、14Q48字詰め18行25歯送り、天一七・五ミリ、地二四・五ミリ、小口一七・五ミリ、ノド二〇・七五ミリ……まるで寿限無寿限無のごとき文言だが、これが「指定」というもので、学術図書の場合、編集者のこうした指定によって組版がなされる。つまり、書籍の中身は編集者が、外側の表紙やカバーはデザイナーが手がけることが多い。

デザイナーとしては「カバーだけでなく、本文の組版も含めて全体のアートディレクションを任せてほしい」という意見が圧倒的だろう。編集者も望むところではあるが、時間的な制約、経済的な事情からなかなかそれが叶わない。

しかし稀にではあるが、編者＝著者＝アートディレクター（デザイナー）という三拍子が揃うことがある。そうなると編集者は大胆な本づくりが体験できる。

教科書では、白尾隆太郎監修『graphic elements グラフィックデザインの基礎課題』がそれにあたる（B5判変型、二〇八頁）。コミュニケーションデザインコースのこの教科書は、書籍そのものが教材となる。扉はどうあるべきか、何がページレイアウトの美しさを決めるのか、どんな余白が効果を生むのか、編集者が具体的に学ぶ機会にめぐまれるのは幸せなことだ。しかし、できあがったレイアウトは次々とpdfで送られ、即座にその返事をせねばならず、編集者にとっては時間的に苦しいのも事実である。

板東孝明編『ホスピタルギャラリー』は、四六判、二七二頁、モノクロの小さな本ながら写真図版が主役。本書は編者である板東さんがアートディレクター、組版はデザイナーの平野昌太郎さんが担当された。こういう書籍の場合、

新刊案内

芝 正身 著
北一輝と萩原朔太郎——「近代日本」に対する異議申し立て者
A5判・三五〇頁・本体三〇〇〇円
明治以降の「近代日本」に対する最もラジカルにして根本的な異議申し立て者であった北一輝と萩原朔太郎の精神の軌跡を探る。

浅野慎一・佟 岩 著
中国残留日本人孤児の研究——ポスト・コロニアルの東アジアを生きる
菊判・五五八頁・本体八九〇〇円
中国残留日本人孤児の人生・生活がもつ歴史・社会的意義を東アジア——特に日本と中国——の社会変動・変革との関連で解明。

早川紀代・江刺昭子 編著
小和田美智子・石崎昇子・永原和子・山村淑子・金子幸子・海保洋子・宇野勝子 執筆
原爆と原発、その先——女性たちの非核の実践と思想
A5判・一九〇頁・本体二〇〇〇円
総合女性史学会に所属する九名による原爆・実験の被害を検証。さらに原発立地、建設を阻止した住民たちの実践事例を紹介。

細谷 昂 著
庄内稲作の歴史社会学——手記と語りの記録
菊判・五八四頁・本体一二〇〇〇円
何時、どんな人が、どんな工夫を積み重ねて日本の稲作農村を作り上げてきたのか、庄内地方を事例に人々の思いと行動を描く。

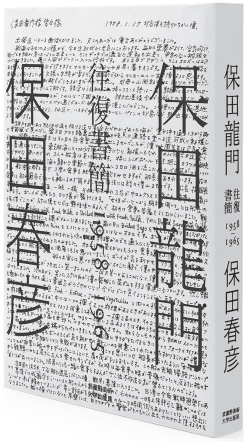
御茶の水書房
〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751
http://www.ochanomizushobo.co.jp/

写真の画像補整を誰が行うのか、これは大問題だ。「それは装丁とは関係ないだろう」と言われそうだが、書籍全体の仕上がり（美しさ）にとって、図版は命。本書では、平野さんが時にはカメラマンにもなり、写真データを細部まで調整してくださった。

信頼できるデザイナーに任せておけば、すべてうまくいくわけではない。意外に思われるかも知れないが、図版キャプションには、本の印象を大きく左右するヒミツが隠されている。図版のある箇所だけ次々とページを繰ってみよう。図版とキャプションによって内容が追体験できるか、ストレスなく読み進められるか、その文体、文字の大きさ、書体の選び方で印象はかなり異なる。きれいな本づくりに編集者ができることはたくさんある。

抱いて眠りたくなるような本をつくろう

白井敬尚さんのアートディレクションによるものに、板垣鷹穂著『建築』、フレット・スメイヤーズ著『カウンターパンチ　16世紀の活字製作と現代の書体デザイン』、『保田龍門・保田春彦 往復書簡1958-1965』がある。教科書をはなれ、学術書という縛りからもはなたれた珍しい企画である。ことに往復書簡は、A4判上製クロス装、四七二頁という迫力で、地味な書簡集がこんなに艶やかな姿になるとは想像もしていなかった（しかし内容は恋文なので、見返しのショッキングピンクもまことに相応しい）。



本誌八六号から九九号の表紙デザインも白井さんが手がけられ、目次の文字だけで構成されていた。この一四冊をずらりと並べると、小さな仕掛けがあることに気づく。同じデザインに見えながら、実は毎号、書体がちがう。文字に慣れていなくても、アステリスクと呼ばれる記号「＊」には顕著にかたちの差違が現れる。シリーズものならではの楽しみがあり、大事に持っていてもらえる要素になったのではないかと思っている。読み終えたあとも、たまに並べて「ふふふ」とほくそ笑むような感覚。こうした悦びが、紙媒体にはある。書店をぶらぶらして何冊も開いては閉じるのを繰り返すのも、こうした悦びがあるからだろう。

単位習得のために読まざるを得ない教科書もあれば、眼が啓かれるような専門書に出逢う感動もあるのが学術書の魅力である。内容第一であることは当然だが、手にして「なんとなく好き」と言われるような（稀覯本のフェティシズムとはちがう）愛される本づくりをしたい。

特集＊装幀を考える

装幀をめぐる問題系についての試論——書店・書店員の観点から

大矢靖之（紀伊國屋書店新宿本店）

はじめに

この小論では、書店における装幀の重要さについて、そして装幀と売上の関係について、幾つかの見方を提示することを目指したく思います。

「書店における」という表現をここで用いましたが、その意味を補足しておきましょう。装幀の重要性についてふれる論者は数多くいらっしゃいます。しかし、その多くは装幀家、編集者達であって、実際の書店で装幀がどのような意味を持つか、書店員が言及した機会はそう多くないようです。

装幀が書籍の売上にとって重要な要素だ、ということは多くの書店員が認識しているはずなのですが、その認識を明晰に表現することは難しいように思えます。というのも「本が売れた」事実の理由としてとりもなおさず挙げられるのは、多くの場合、著者、テーマ、そして本の内容ではないでしょうか。そして装幀をある種のコマーシャルメッセージとみなすとして、販売促進に関わるあらゆるセグメントがどう売上と結びついているかを正確に把握することは難しいのです。ならば、装幀が売上に一定の役割を果たす、影響する、などということが果たしてあるのでしょうか。

ある、というのが私たちの主張となります。この小論では、まず装幀と書店が織りなす「購書空間」とも呼べるものを小売業の立場から明らかにしていこうと思います（第1節）。次に、装幀と書店員の関わりについて、当の書店員による数少ない言及にふれながら、吟味したく思います（第2節）。そして学術書における装幀の重要性を、書店の立場から考えます（第3節）。最後に、本稿で指摘した装幀の重要性を確認しつつ、ブックデザインについて言及し、

本の立体的な在りかたについてふれることを目指します（第4節）。

なお、この小論では、装幀を「表紙やカバー、帯、見出し、トビラなど外回りの表層に限定したデザイン」と定義した上で話を進めましょう[1]。本文組の体裁を含めたトータルな取り組みとしてのブックデザイン（あるいは造本）については当面言及しないでおきますが、先に示した通り、末尾で示唆することになるでしょう。

1　書店における装幀の役割

まずは装幀と書店の関係を論じるにあたって、菊地信義氏の著書『新・装幀談義』から然るべき箇所を引用します。書店における装幀の役割が、来客者（読者）の視点を交えつつ、素朴かつ易しい仕方で記されているからです。

「人は、漠然と本を読みたいという思いで書店に行くことがあります。そんなおり『いい本だな』という印象から目に入る本があります。手にして帯の表裏を読み、目次に目を通し、前書きやあとがきを覗き、パラパラとめくり、目に止まる行を読んでいる。タイトルが内に沁みてきて、レジへ向かう――そういう出会いを作品と人にもたらすのが、装幀の仕事です」[2]

装幀はまず、来客者が本との出会いを果たす出発点に他ならないことが理解されます。無粋ではありますが、この菊地氏の言及を、書店員（ないし小売業者）の立場からパラフレーズしてみましょう。装幀の果たす役割のひとつに、無目的な来客、あるいは一見客に本を手に取らせる機会を産み出す、ということが挙げられます。装幀はまず「いい本だな」と思わせる印象的なアイキャッチとして働き手に取らせ、読み手の購買意欲を沸かせ、内容をポジティブな方向に印象付ける。そして、それぞれの帰結として顧客に衝動買いを促すというわけです。

言い換えれば、「本を買う」という消費行動の背景ないし水面下で、ひっそりと装幀が影響しているのだ、とも言えるでしょう。

では反対に、目的買いの顧客において装幀はどう働くのでしょうか。目的買いは、既に顧客側が買いたいものを決め、タイトルなども準備して来店するのだから、装幀がその種の購買行動を促すような積極的な機会とはなりにくい――とまでは言えるでしょう。しかし、本のタイトル、著者名、そして内容を過不足なく反映し、媒介するような装幀であればあるほど本を見つけやすくなり、顧客のストレス軽減になり、ひいては書店の売上に結びつきやすくなります。目的買いの場合において、装幀は表現において何も損なうことなしに、検索性に優れていることが求められるのだと思います。とりわけ、目的買いが多くなる学術書においては。

一度、先の菊地氏の引用に立ち返り、その続きを追ってみましょう。

「どんな作者の作品であれ、本になって書店で読者と出会う瞬間に、まず『いい本だな』という印象をもたらしてみたい。著名な作者の本であればあるほど、読者の目と心を、はじめて出会うように本と向き合わせたい。著者名やタイトルが知覚される寸前に、『いい本だな』という印象が先行する、それがいい装幀だと思います」(3)

「いい本だな」という言葉が何度も装幀との関係において記されていることに注意を向けておくべきでしょう。装幀は、顧客に「いい本だな」と思わせることで購買意欲を高め、購書空間に貢献しているものと考えられるのです。

2　書店員と装幀

書店という購書空間における顧客と装幀との関係について述べてきましたが、装幀と書店員の関係についてもふれておこうと思います。『装幀＝菊地信義』という書籍に、装幀について書店員によるまとまった言及が確認できます。

まずは、『書店風雲録』などで知られる田口久美子さんが、菊地信義さんの装幀について言及している小論を導きの糸にしましょう。この小論は、一九八六年当時、田口さんが顧客から本の在庫を聞かれた時の話から始まります。この時期は書店にＰＯＳシステムや在庫検索システムなどが完備されてはおらず、商品管理がまだまだ属人的なものだった時期といってよいでしょう。問い合わせを受けた田口さんが思い出そうとするのは、本の装幀なのでした。

「……『お客さま最近出た本でしょうか？』と聞きながら、うーんと考えこんで、新刊入荷台帳をめくり始める時、思いだそうとしているのは、本の装幀である。頭の中にカチッと著者と装幀が思い浮かべられたら、しめたものだ。そうだあの本はあったはずだ。本が呼んでくれる――と私は信じている。毎日棚を見ていると、必要な時は〝ここにいます〟と本が顔を出す。本の内側からではなく、装幀という外側から」(4)

かつての書店にとって、本の装幀が書店員にとって大事な商品情報の一つであったことがわかります。いまはネットや社内の検索システムで書影や装幀も分かり、必ずしもそれらを記憶する必要は無いかもしれません。が、先に挙げた引用と似た状況は今でも頻繁に起こりえます。書店員の脳裏に表紙・装幀が閃き、案内の助けになり、実売に結びつくことも少なくないのです。

更に言えば先の引用部は、書籍内部のテクストに対し、ある種の物質性を持ったコンテクストを与えるのが装幀で

ある、という示唆を含んでいるようにも思われます。

さて、松田静子さんという書店員の方も、装幀について示唆に富む意見を述べています。

「実際、私たちが本と出会うときには、手に取ってみて、重さとか、厚みとか、手触りなどによって、この本は良さそうだなと思うわけで、装幀というのは意外に重要なんですよね」(5)

菊地氏、田口氏の言及と呼応するかのような内容です。本の良し悪しに装幀が影響すること、装幀が本というテクストに物質性を与えていることが確認されます。それだけでなくこの箇所からは、装幀が顧客に対して影響するだけでなくて、本の媒介者たる書店員に対しても影響を及ぼしていることが分かります。本を並べ陳列する書店員が「いい本だな」と思った本は、書店の棚においても陳列・展開に比重がかかることもあるでしょう(6)。

購入者たる読者だけでなく、書店員を一個の読者としても巻き込みながら本を手に取らせ、本の陳列時の魅力を増し、魅力的な購書空間を創り出し、購買行動を引き出す。それが装幀のもつ可能性の一つではないでしょうか。

3　専門書における装幀の重要性

ここまで装幀の重要性について述べてきましたが、それはより専門的な学術書においても同様であろう、と考えます。時に、学術書においては内容が重要であって装幀は二の次だ、という声も聞かれます。内容が重要であることは全く否定の余地がありませんし、様々なコストをかけるべき優先順位も内容優先であって然るべきでしょう。しかしながら、昨今出版不況が叫ばれる中、限定された専門家の範囲だけでなく、隣接領域を含む「関心をもつ読者」に学術書を開いていくためには(7)、装幀が大事なファクターになると思われます。

装幀が読者と書籍の出会いの場に貢献することは第1節で既に述べましたが、これは学術書にとっても考慮されるべき事柄です。加えて専門書において重要と思われるのは、新聞書評における書影でしょう。学術書の売行が書評に左右されることは出版関係者にとっては自明なこと。しかし、新聞のモノクロ誌面において、字が小さすぎる、タイトルが背景に埋もれる、という理由で書影映えしない書籍も存在します。アイキャッチが働かずに書籍へのアクセスを阻害する可能性が生じ、購買へ至る回路が断たれかねません。

近年、一般的には「装幀もタイトルもシンプルなものが売れる傾向にある」(8)のですが、そのシンプルさは書店店頭、書影紹介、ネット書店など様々なメディアにおいて有効だからこそ、実売に貢献している可能性があります。ここで、サンデル『これからの「正義」の話をしよう』(早川書房、二〇一〇年)をはじめとした、水戸部功氏の手になるタイ

ポグラフィ主体の装幀を思い出しても良いかもしれません。水戸部氏は自らのデザインをネット書店の書影画像だけでも印象に残るよう意識していると言います。「とくにビジネス書の場合、ネット書店での売れ行きは無視できませんから」(9)。この言及に注目すべきでしょう。ネット書店の動向を無視できないのはビジネス書に限らず学術書においても同様であるからです。

学術書の装幀は概してシンプルで、書影映えについて問題が生じることは稀だったのではないか。ゆえに先述の論点が先鋭化されることはなく、見失われがちではなかったか、と想像します。しかしながら書店員の目線からあらゆる媒体に目配せをする中で、専門書における装幀の問題は再考されてよいのではないか、という思いは益々強くなります。

4　装幀からブックデザインへ——おわりにかえて

ここで一度、振り返っておきましょう。「装幀が売上に一定の役割を果たす、影響する」ことについて、一定の回答を得られたのではないでしょうか。装幀の売上への影響は、およそ見極めがたいものがあるにせよ、何一つ影響していないということは全くありえない。装幀は著者、テーマ、そして本の内容を反映し、時には溶け合い、共鳴して、それぞれが分かちがたい仕方で働き、顧客の購買行動を促し、結果として売上に関わってくるのです。

しかし、ここまで装幀という外部性について言及を続けてきましたが、装幀の力とその影響について著しい過剰評価をすることは慎まねばならない、とも思います。というのも、「はじめに」で定義した通り、装幀は「外回りの表層に限定したデザイン」であるからです。

まず、装幀の過剰評価は、本来重要であるはずのタイトル・著者・テキストの軽視を促しはしないか。もっとも、その軽視が行われないよう本稿は注意深く努めたつもりですし、装幀というものがタイトル・著者・内容を反映し、

藤原書店

家族システムの起源
Ⅰ ユーラシア 上下
E・トッド
「家族システムの起源は“核家族”である」とした40年の集大成であり、著者による世界史の達成！「ヨーロッパの繁栄の理由は、技術的・経済的発展を妨げる家族システムの変遷を経験しなかったから」。石崎晴己監訳
上 4200円　下 4800円

時代区分は本当に必要か?
連続性と不連続性を再考する
J・ル＝ゴフ　「時代」概念の再検討を鋭く迫る、生前最後の書き下ろし作品。　菅沼潤訳　2500円

サマルカンドへ
ロング・マルシュ　長く歩く Ⅱ
B・オリヴィエ　中央アジアを一人で歩く。シルクロード徒歩の旅、第2弾。内藤伸夫・渡辺純訳　3600円

沖縄健児隊の最後
大田昌秀編　沖縄戦で少年らは日本軍司令部直属隊に超法規的に徴用され、半数以上の戦死者を出した。壮絶な手記。3600円

絶滅鳥ドードーを追い求めた男
空飛ぶ侯爵、蜂須賀正氏 1903-53
村上紀史郎　謎の鳥の探究に生涯を捧げた貴族の実像。3600円

岡田英弘著作集 全8巻
中国でも注目され始めた歴史学者の集大成、いよいよ完結！
⑧世界的ユーラシア研究の六十年
最終配本8800円　全巻計44100円

月刊 機
B6変32頁 8月号 №293
加藤登紀子／石牟礼道子／加藤晴久／新保祐司／子安宣邦／田中克彦／大田昌秀／中西進／中村桂子／三砂ちづる／尾形明子 ほか
年間購読料2000円(送料込)　◎見本誌・ブックガイド呈　＊表示価格税抜
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523
振替 00160-4-17013　TEL 03-5272-0301
ホームページ http://www.fujiwara-shoten.co.jp/

深化させた表現であるとすれば、この軽視という表現はそもそもが無用な問題設定であるのかもしれません。

ですが、懸念はもう一つ。それとは異なる軽視が生じてはいないか。装幀の過剰評価が、書籍全体への取り組みたるブックデザイン（造本）全体の軽視、あるいは無視に繋がる――あるいは逆に、そもそもブックデザインの軽視・無視が装幀という問題設定の背後に存し、うごめいている場合すらあるのではないか――ということを否定できるものでしょうか。

例えば鈴木一誌氏の『重力のデザイン』には、装幀への過度の関心を注意深く戒める言及が見られます。文脈としては、組版にまつわる諸問題を挙げている箇所になります。組版の画一化によって、あらゆる書物の本文の形が似てしまった。その平準化と並行して起きるのが、「いささか異常ともいえる装丁への関心の高まり」であり、「のっぺりした本文を補填するかのように、書物の表面である装丁に過剰な期待が寄せられる。一冊ずつの書物がもつべき起伏を、装丁が一身にになわされる構図だ」というわけです[10]。

鈴木氏の指摘を受け止めるなら、本を内・外の区分で考えるのではなく、むしろ本を一個の立体物として考え、視界を拡げ、可能性を考えていくことも必要なのかもしれません。例えば、祖父江慎氏がこれまで関わってきた『伝染るんです。』や漱石『心　新装版』のブックデザインが評判となり、書籍の実売に貢献したことは想像に難くないでしょう[11]。また、二〇一四年に生まれた新しい出版社、「共和国」の発刊する本は、常にその内容とともにブックデザインが評価され、様々な媒体に紹介されたことが、書籍の実売に結びついているとも考えられます[12]。

おそらく、本の装幀に目を向けるだけでは、見失われるものがあるのです。テキストの持つ力、その力を引き出す組版、そして本の構造特性に基づいた書籍の立体的空間設計――つまりブックデザインが、テキストとその可読性や新たな読書体験に道を開くこともあるのでしょう。ひいては、書籍増売についても同様に。

但し、ブックデザインを語る資格が私には欠けていますし、紙面も尽きました。本節の問題提起は、示唆に留めておきます。ブックデザインの一部たる装幀の重要さについて幾つかの視点を提示することができたなら、あるいはこれらの視点を多重化することができたなら、私たちの目的は達せられたことになるでしょう[13]。

（1）装幀とブックデザインの定義は論者・デザイナーによって諸々ありますが、本稿は、臼田捷知『装幀列伝』（平凡社、二〇〇四年）七頁における区分に準拠。
（2）菊地信義『新・装幀談義』（白水社、二〇〇八年）二三―二四頁。
（3）同上。
（4）『装幀＝菊地信義』（フィルムアート社、一九八六年）、R―四九―五〇頁。
（5）同上書、R―八七頁。

（6）　しかし、書店員泣かせの装幀仕様というのもあります。片桐由美子さんによれば、外箱が汚れやすいうえに破れやすく、困ってしまうシリーズがある。詩集のカバーなどによく使われるグラシン紙はホコリを吸着しやすい。昨年から今年にかけては、白がテーマなのかなと思うぐらい、白を使った本は、きれいだけど汚れやすい、と様々な実例を挙げています（同上書、R―九六頁）。書店店頭における書籍の立ち読みや商品運搬に、デリケートな装幀が耐えられないこともしばしばあるものです。なお、店舗照明でヤケやすくなる装幀もあります。装幀における保存性の問題についてはこれ以上ふれませんが、単行本の装幀は、書店や個人宅における長期の陳列に耐える本であってほしいと願います。

（7）　橘宗吾『学術書の編集者』（慶應義塾大学出版会、二〇一六年）四四頁、一五九頁における、編集者の意見を参照。

（8）　丸善丸の内本店（当時）の書店員、田中大輔氏の言及を参照。http://www.henshusha.jp/2010/10/14/promo-word-7/

（9）『デザインのひきだし28』（グラフィック社、二〇一六年）四八頁。

なお水戸部氏は続く箇所で、「〝ネット書店映え〟する、しないという話も、流通の変化に装幀がどう対応できるかという問題を示しているのではないかと感じています」という示唆に富む言及を残しています。

（10）　鈴木一誌『重力のデザイン』（青土社、二〇〇七年）八四頁。

（11）　『伝染るんです。』については多くの文献があるため紹介は省略。『心　新装版』におけるブックデザインの重要性については、以下のURL先が詳細。http://type.center/articles/5510

（12）　例えば、『遊廓のストライキ』（共和国、二〇一五年）は、「朝日新聞」二〇一五年四月五日付書評「毎日新聞」四月一九日付書評欄「今週の本棚 Cover Design」などで、その特徴的な装幀・ブックデザインが併せて紹介されました。初版はすぐ品切となり、すぐに新装版が再販売されたことが記憶に新しいものです。

（13）　棚における陳列の問題も、本稿で論じ残したことの一つです。書店員は優れた装幀の書籍をどう面陳列・平積し、装幀同士をどう際立たせるか、文脈を持たせ、売上を作ろうとするのか。絶対的な解答のない問題ですが、今後の課題として論究する準備を整えておこうと思います。

憲法論議を民主主義の深化に寄与させるために

「憲法改正」の比較政治学

駒村圭吾・待鳥聡史【編著】
日本を含む7か国における「憲法改正」の姿を、政治学・国制史学と憲法学との協働により多面的に描くことで、建設的な議論のための視座を提供する。
●本体4600円＋税

道徳よりも法に従うべき根拠とは何か

遵法責務論
《法哲学叢書10》

横濱竜也【著】
法と道徳が衝突する場面で最後には道徳を犠牲にしてでも、法に従うべき正当化根拠を根底から問う。遵法責務問題の復権への道筋を鮮やかに示した著者渾身の一冊。●本体3600円＋税

弘文堂
101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-7
Tel 03-3294-4801 / Fax 03-3294-7034
http://www.koubundou.co.jp/

命の形 | 形の命

Lives of Form | Form of Lives / No. 09

まず、子どもたちに美しさの感性を
育てることが
私たち大人の責任である
それは美しい環境を子どもたちに
与えることなのである

子どもは**真っ白い紙**

何でも書き込める

国道沿いののぼり旗

欲望に満たされた
街の中での
看板の氾濫
電車内の中吊り広告

公共乗物も
広告で塗りつぶされている

これらは必ずや
子どもたちの美意識を無感覚にさせて
いるのではないかと思う

政治とは子どもたちを守るためにある

双葉の時は皆似ている なぜか

テレビというメディアは子どもの成長に多大な影響を与える

日本の TV 番組の登場人物の背景は
何と下品なデザインなのだろう

豊かな美意識を育てる大切な幼児期に
あの画面を見せるのは
マス・メディアに責任がある

小さな小さな芽を育てる

生まれた時から子どもたちは
電子メディアに囲まれている
それで書物への愛着が
育つのかな

日本の自然は世界に誇れるほど
豊かで美しい
私たちが生活している空間は、
その自然の延長上にある
まず私たちが手をつけるべきこ
とは、美しく豊かな生活空間
を作り上げなければならない
家の中のインテリアは個人の意
志で美しくもなるが、その外側、
つまり、美しい村・街・都市の
公共空間は全ての人々の共感無
くしては実現することは不可能
なのである
美しいと感ずるのは欲望を制御
することも必要なのだ

都会の子どもたちは
天空の
無数の星を知らない

だから星がなぜ
空から落ちないのだろうと

考えても
みないだろう

自然から学べば　自然は喜ぶ

苦労すれば君が育つ
苦労がなければ楽が見えない

人は土から生まれ出た

子どもたちを
裸足の感触へ誘う

中垣信夫｜グラフィックデザイナー
Nobuo NAKAGAKI｜GraphicDesigner

大学出版部ニュース

表示価格は税別です。

▼岡山県立図書館で夏季研修会を開く

五輪4連覇で国民栄誉賞ということらしいが、来館者および個人貸出冊数とも国内10連覇の公立図書館があると知って、今夏の協会研修会は岡山県立図書館の多目的ホールをお借りして開催した。初日の全体会は法政大学から、デザイン工学部教授・前法政大学出版局理事長の陣内秀信先生と、社会学部教授金原瑞人先生をお招きして、「大学出版部の多様な可能性を追求する」と題したワークショップの形式をとった。法政大学出版局古川真氏の司会、黒田拓也理事長のファシリテーターによる進行で、参加者からも多くの意見を徴し、議論が進むにしたがってテーマは当初の枠を越えて多岐に広がった。学術書の出版とは、から始まって、大学教員における論文著述の問題点と本の出版、必要最小限の本しか買わなくなった学生たち、大学教育の観点と出版、販売の視点からみた出版の構造的問題、学術出版とローカリティ、大学のブランディング化と教員の新しい動き、電子化による学術研究の変化、本当に本は売れなくなってきたのか等々、論点は自在に飛びかい、制限された時間でこれだけ多彩な意見を聴くことができたのも一つの収穫であったように思う。

研修二日目は司書の方から蔵書検索や自動貸出システムの説明を受け、館内とバックヤードの要所を案内していただいた。午後は東海大学出版部稲英史氏の日韓合同セミナー・プレ報告「ある図鑑の刊行が大学出版部にもたらしたもの」が行われた。この40年間で77点の図鑑を刊行したという同出版部だが、中でも一九七五年に刊行した最初の図鑑『魚類図鑑南日本の沿岸魚』について、その役割や販売を詳細に語ってもらった。

×月〇日

電子書籍の出現以降、この業界ではずっと紙と電子の本の対比性（関係性）が論じられているわけだが、過日、東京大学大学院佐倉統先生の一文にふれることがあった。著者は電子と紙媒体のそれぞれの長所を丁寧に列挙してから、最近の紙の本はその生命線である「物」としての完成度（装丁や造本）が落ちていないか、また書籍の電子化は紙に遠慮せずもっと強力に推進されるべきではないかと提言している。紙と電子は両方合わせて「本」であり、これらは相互に競い合う関係ではないというのである。そのことはいま業界で行われている実験的な試みでも一部証明されており、この考え方はだんだんと浸透してきているようである。

北海道大学出版会

▼市川浩編著『**科学の参謀本部―ロシア／ソ連邦科学アカデミーに関する国際共同研究**』（A5判・五三八頁・一二五〇円）ロシアの研究者の論文を数多く所収。ロシア・ソ連史研究者必読の研究書。

▼辻信一著『**化学物質管理法の成立と発展―科学的不確実性に挑んだ日米欧の50年**』（A5判・五七六頁・一〇〇〇円）科学的不確実性に対処する際の法規制の適用領域とその限界について考察。

▼西村淳編／北海道大学公共政策学研究センター監修『**公共政策学の将来―理論と実践の架橋をめざして**』（A5判・三五二頁・五二〇〇円）広範な分野における公共政策学の現状を論じ、将来を展望。

▼山口裕文・金子務・大形徹・大野朋子編著『**「中尾佐助　照葉樹林文化論」の展開―多角的視座からの位置づけ**』（A5判・七九八頁・一六〇〇円）多彩さと猥雑さを通し照葉樹林文化の本質を論考。

▼関孝敏・松田光一編著『**北海道南西沖地震・津波と災害復興―激甚被災地奥尻町の20年**』（B5判・三八四頁・九二〇〇円）激甚被災地奥尻町の災害復興過程に関する二〇年にわたる考察をまとめた。

弘前大学出版会

▼杉山祐子・山口恵子著『**地方都市とローカリティ―弘前・仕事・近代化―**』（A5判・三〇六頁・三二〇〇円）旧城下町の歴史をたもちつつ常に外からの人や機関の流入に応じて変化し続けてきた地方の「まち」、青森県弘前市における「近代化」と「ローカリティの生成・再編」の過程を、六年間にも及ぶ綿密な社会学・人類学的フィールドワークおよびデータ検証を通じて明らかにする。地方都市の時間における仕事・暮らしのダイナミックな変化を浮き彫りにした本格的研究。

▼李永俊・渥美公秀監修『**東日本大震災からの復興(3)たちあがる　のだ―北リアス・岩手県九戸郡野田村のQOLを重視した災害復興研究**』（A5判・二八二頁・三四〇〇円）東日本大震災で津波被害を受けた、岩手県九戸郡野田村の被災と復興をテーマとする三巻シリーズの最終巻。野田村とその復興過程との間で深い絆を結んできた研究者たちが、専門（社会学、社会心理学、法学、経済学）の見地から復興の最前線を記述。具体的で詳細な分析の行間からは、確かな未来を見いだした野田村の今の姿が「たちあがる」。

東北大学出版会

▼東北大学高度教養教育・学生支援機構編『**高等教育ライブラリ10　高大接続改革にどう向き合うか**』（A5判・二五四頁・二〇〇〇円）高等学校教育と大学入試の改革の中枢で、何が起こってきたのか？　多様な課題を抱えた中で進む改革に高校と大学の現場からどのように取り組むべきなのか？　高校、大学、そして大学入試にかかわる現場の識者の論考から、現在進行の問題を整理し対応の手がかりを提示する。高等教育ライブラリシリーズの最新刊。

▼稲澤努著『**消え去る差異、生み出される差異―中国水上居民のエスニシティ**』（A5判・三〇二頁・三五〇〇円）中国南部の水上居民「疍民（たんみん）」を研究対象に、マジョリティによって描かれてきた水上居民イメージの形成と再編、陸上のマジョリティとの目に見える文化的差異の減少、その境界の維持あるいは変遷を明らかにする。先行研究の分析と現地フィールドワークによって、元水上居民である「漁民」の自他境界の消長を分析する。第10回東北大学出版会若手研究者出版助成採択作品。

流通経済大学出版会

▼中山秀登著『**民法の流れ図―物権**』（B5判・三六二頁・三二四〇円）本書では、民法、第2編、物権を図解した。ある人（A）が、一台の自転車を、店で買って、所有権を取得したとする。その自転車を、他人（B）が盗んだ。Bは、どろぼう、である。しかし、Bは、盗んだ自転車の占有権を持つ。Aは、Bにたいし、自転車の返還の権利を持つ。反対に、Bは、Aにたいし、自転車の返還の義務を負う。以上のように、物権のばあい、人と人との間に、物がある。以上の例では、物は、自転車という有体物である。物には、債務者の行為すなわち給付のような無体物も、ある。いずれにせよ、人と人との間に、有体物または無体物があり、人と人とは、以上の物について、権利・義務があって、時の流れに沿って、権利・義務が移り変わっていく。本書では、物権を、人と物を結ぶ、線で表す。所有権は綱、抵当権などは糸、とする。抵当権などは、所有権の綱から抜き出された、一本の糸である。占有権は、別種の糸である。本書の出発点は、筆者が、紙と鉛筆で、図解してみたことである。

聖学院大学出版会

【近刊】

▼窪寺俊之編著『**スピリチュアルな存在として―人間観・価値観の問い直し**』〈スピリチュアルケアを学ぶ7〉（A5判・予価二三〇〇円）実践に先立って、現代社会とそれに取り込まれている自分自身の人間観・価値観を問い直す。

▼松本祐子著『**魔女は真昼に夢を織る**』第Ⅰ部には、〈Witches Weave the World〉から想起される、みずからの手で世界を紡ごうとする異端の〈魔女〉たちをヒロインとした創作ファンタジー「魔女の森」、「氷姫」、「ガラスの靴」を、第Ⅱ部「語りの魔法に魅せられて」には、物語世界に表象された〈魔法〉をめぐる論考として、「魔法ファンタジーに見る知と力の関係」、「おとぎ話の功罪」、「魔法の食卓」、「魔法にかけられた子どもたち」などを収録。

カバーイラスト：佐竹美保

聖徳大学出版会

▼塩美佐枝・古川寿子・川並珠緒・関口明子・羽生和夫著『**幼児理解と一人ひとりに応じた指導**』（B5判・一一六頁・一五〇〇円）

幼児理解と指導について網羅した一冊。

▼聖徳大学特別支援教育研究室編『**改訂版 一人ひとりのニーズに応える保育と教育―みんなで進める特別支援**』（A5判・二一八頁・一五二八円）

初学者のための特別支援教育本。

▼川並知子・広瀬知里著『**子どもと親のためのおりがみアイディア**』（B5判・一二八頁・一五〇〇円）

幼児から大人まで楽しめる折り紙遊び本。

▼川並知子著『**さくら紙あそび**』（B5判・六四頁・六五〇円）

さくら紙（お花紙）のあそび方の決定版。

▼森彪著『**医における癒し―人間関係の形成のなかから**』（四六判・二八〇頁・二〇〇〇円）

医療現場での人間的交流の必要性を説く。

▼村井靖児著『**音楽療法を語る―精神医学から見た音楽と心の関係**』（四六判・二八〇頁・二〇〇〇円）

音楽療法の第一人者である著者の集約本。

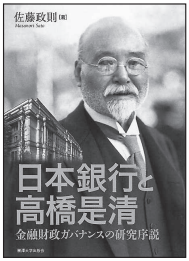
麗澤大学出版会

▼佐藤政則（麗澤大学教授）『**日本銀行と高橋是清――金融財政ガバナンスの研究序説**』（A5判・二四〇頁・二一〇〇円）。

高橋是清は、一八九九年から一九一三年の一四年間、日本銀行副総裁・総裁として政策運営の中心にいた。本書では、日本銀行における高橋の金融財政家としての姿を明らかにし、金融財政ガバナンスが誕生する一九一〇年頃と終わりを迎える一九三〇年代半ばを対象に日本銀行と高橋経済論の軌跡を論究する。

〈目次〉

序／第一章　高橋是清の立身と日本銀行／第二章　金融政策の転回――一九〇一年金融恐慌／第三章　明治末正貨危機と金融政策／第四章　日銀引受国債発行とシンジケート銀行／むすび――二・二六事件の金融史研究へ／補論1～3



慶應義塾大学出版会

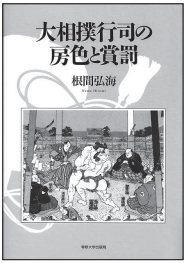
▼渡辺優著『**ジャン＝ジョゼフ・スュラン――一七世紀フランス神秘主義の光芒**』（A5判・四九六頁・八〇〇〇円）「ルダンの悪魔憑き」事件などの超常の体験や「暗き信仰」を潜り抜けた一七世紀フランス最大の神秘家が辿り着いた信仰の境地とは？　神秘主義を同時代の思想潮流に位置づけ、神秘主義への新たな理解を提示する、宗教学の最先端の研究成果。

▼橋爪烈著『**ブワイフ朝の政権構造――イスラーム王朝の支配の正当性と権力基盤**』（A5判・四一六頁・九〇〇〇円）一〇世紀前半にアッバース朝カリフを傀儡化し、イラン・イラク地方に覇を称えたブワイフ朝の君主の系譜と権力の構造を、丹念な史料読解により描出。従来の同王朝史研究に一石を投ずる好著。

▼中西恭子著『**ユリアヌスの信仰世界――万華鏡のなかの哲人皇帝**』（A5判・三三六頁・七五〇〇円）ユリアヌスはなぜキリスト教に背いたのか――。「背教者」として知られる古代ローマの哲人皇帝ユリアヌスの信仰世界を、最新の研究知見と宗教心性史・精神史の見地に基づく史料分析によって明らかにする野心作。

専修大学出版局

▼根間弘海著『**大相撲行司の房色と賞罰**』（A5判・二一六頁・二六〇〇円）毎回好評を博している、「大相撲」シリーズの第四弾。大相撲行司の軍配の房色と階級の関係性、行司の階級の昇降など、大相撲行司について七つのテーマを取り上げ、現存する文献・錦絵・資料を丁寧にあたって分析・考察する。戦後行司の年譜も掲載。



＊「大相撲」シリーズ既刊　好評発売中。

▼『**大相撲行司の軍配房と土俵**』〔二〇一二年八月刊〕

▼『**大相撲行司の伝統と変化**』〔二〇一〇年七月刊〕

（『大相撲の歴史に見る秘話とその検証』〔二〇一三年七月刊〕は品切れ。）

大正大学出版会

▼大正大学地域構想研究所編『**地域人**』（A4判・平均一四四頁・八一五円・毎月十日発売）「現代社会の最優先課題は、地域創生にある」をテーマに、地域の実態理解と再生の方法論をさまざまな視覚から紹介する地域情報満載の総合情報誌。地域特集では、現地取材をもとに、物事を経済的視点だけから見るのではなく、多様な文化、歴史、暮らしに至るまでを掘り起すことを目指している。一方で、地域創生とは何かを豪華連載人による、人口、産業、食文化、リノベーション、ふるさとと信仰など、社会から心の問題まで幅広い提言を毎号掲載する。第一二号 特集―最上川を往く／最上地域・新庄市、最上町、金山町／庄内地域・鶴岡市、庄内町、遊佐町／村山地域・寒河江市他

玉川大学出版部

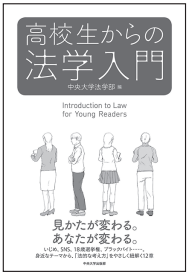
▼中島英博編著『**シリーズ 大学の教授法 1 授業設計**』（A5判・二二四頁・二四〇〇円）シラバス例、評価のための基準などを多数掲載。実践的な授業設計の指針と技法をわかりやすく提供し、経験の浅い教員から豊かな教員まで広く活用できる。好評『アクティブラーニング』に続く、シリーズ第二弾。

▼佐藤浩章、中井俊樹、小島佐恵子、城間祥子、杉谷祐美子編『**大学のFD Q&A**』（A5判・二一二頁・二〇〇〇円）教員、職員、管理職に向けた具体的なノウハウ集。現場のリアリティを反映した一〇〇の疑問に対し、多彩な経験をもつ執筆者らが、研究の知見をもとに回答。アンケート例など、充実した資料付き。

▼パメラ・J・ファリス、ドナ・E・ウェルデリッヒ著／高橋邦年監訳／渡辺雅仁、田島祐規子、満尾貞行訳『**ランゲージアーツ―学校・教科・生徒をつなぐ6つの言語技術**』（B5判・三五六頁・三八〇〇円）言語に関する能力を基盤に、思考力、判断力、表現力などを育むための具体的な指導方法と、先行研究を踏まえた論理的な裏付けの双方を提供する。

中央大学出版部

▼中央大学法学部編『**高校生からの法学入門**』（四六判・二一八頁・九〇〇円）「お前、昨日、既読スルーしただろ、見たらすぐに返事しろよ。」「既読スルーなんてしてねぇよ。そもそも既読スルーって何なんだよ。」（第10章より）私たちが法を意識する場面はそれほど多くないかもしれませんが、見たり、聞いたり、経験したりすることの中に、法はたくさん溶け込んでいます。また、私たちの日常生活の中で訪れる些細なことを「法的に考える」ということは、とても重要です。いじめ、SNS、ブラックバイト、18歳選挙権……。高校生にも身近に感じられる話題から、「何のために「法」はあるの？（序章）」「「遅刻したらトイレ掃除1週間」は効果的？（第1章）」など、法学へ誘う12のメッセージを、中央大学法学部の執筆陣が送ります。



東京大学出版会

▼小林康夫著『**表象文化論講義　絵画の冒険**』（A5判・三五二頁・三五〇〇円）西欧絵画の歴史を概観し、美術史を大きく超えた「表象」の根源的な枠組みの変化を描く。絵画から世界を見る試み。

▼稲葉昭英他編『**日本の家族 1999－2009―全国家族調査［NFRJ］による計量社会学**』（A5判・三九二頁・五四〇〇円）夫婦関係、親子関係、家族についての考え方等、日本の家族はどのように変わったのか。計量的な分析を通じて問題に挑む。

▼東京大学医学部健康総合科学科編『**社会を変える健康のサイエンス―健康総合科学への21の扉**』（B5判・一四八頁・二五〇〇円）人間・環境・社会の相互のつながりを「健康」を通して科学する新しい学問――健康総合科学。健康を支えるための実践知の意義と面白さを紹介。

▼伊沢紘生著・松岡史朗写真『**自然がほほえむとき**』（A5判・二三〇頁・三二〇〇円）たくさんの動物たちが暮らす豊かな森を歩いてきたサル学者と動物写真家が、日本の自然を愛する人たちへ向けてエッセイと写真で綴る野生動物記。

東京電機大学出版局

▼日本写真測量学会編『**三次元画像計測の基礎　バンドル調整の理論と実践**』（A5判・一九二頁・二七〇〇円）

カメラで撮った画像から、三次元位置の計測や立体物の形状を把握する技術を三次元画像計測という。この技術は、災害現場や、重要文化財などの調査に加えて、自動車の自動運転技術などにも応用されており、土木業界、自動車業界、ロボット業界、医療業界など、様々な業界で使用されている。本書は、従来の写真計測技術の理論やデジタル化の進展によって可能となった計測技術について解説。また、三次元画像計測の基礎技術である「バンドル調整」を取り扱い、様々な写真測量で実装されるバンドル調整の原理や利用方法などを詳解。すぐに実装可能なオープンソースプログラムの適用事例も記載している。読み進めるうちに基礎が身につく、初学者必読の書である。

法政大学出版局

▼鹿島徹／越門勝彦／川口茂雄編『**リクール読本**』（A5判・四一六頁・三四〇〇円）歴史＝物語の解釈学で知られる哲学者が残した膨大な仕事、その驚くべき多面性を一望のもとに概観する。

▼B・ジョンソン／土田知則訳『**批評的差異―読むことの現代的修辞に関する試論集**』（四六判・二九〇頁・三四〇〇円）バルト、マラルメ、デリダなどの難解な著作を扱いながら、明晰にしてスリリングな思考が躍動する脱構築批評の最も魅力的な実践。待望の完訳！

▼権赫泰／鄭栄桓訳『**平和なき「平和主義」―戦後日本の思想と運動**』（四六判・二五六頁・三〇〇〇円）朝鮮戦争、ベトナム反戦運動、日米安保や原発の問題など、アジア諸国や国内における他者と関わるうえで丸山眞男をはじめ日本人は何と向き合ってこなかったのか。

▼白永瑞／趙慶喜監訳／中島隆博解説『**共生への道と核心現場―実践課題としての東アジア**』（四六判・四三〇頁・四四〇〇円）分断という歴史的矛盾が凝縮し、人々が構造的差別に苦しむ核心現場から、和解と共生を導く道を提示する。

武蔵野大学出版会

▼樋口一葉著　千明初美漫画『**漫画版【文語】たけくらべ**』（A５判・二四〇頁・二五〇〇円）樋口一葉『たけくらべ』の原文（文語）を、漫画のフキダシに収めて解説した、これまでになかった新しいタイプの文学ＢＯＯＫ。日本古来の言葉の美しさにふれることができる！

▼ケネス田中編著『**仏教と気づき**』（四六判・一七六頁・一七〇〇円）日本人は仏教を「信じる宗教」だと誤解している。仏教は心身を通して真実に気づく「気づきの宗教」なのだ。「何に、どのように気づくべきなのか？」武蔵野大学の仏教学・印度哲学の専門家が、独自の視点からやさしく解説する。

▼阿部和穂著『**危険ドラッグ大全**』（A５判・二五六頁・二五〇〇円）危険ドラッグは脳にどう作用するのか？　危険ドラッグはなぜやめられないのか…？　薬学部の教授である薬の専門家が、危険ドラッグのすべてを豊富な図版で解説する。

武蔵野美術大学出版局

▼白石学編、小西俊也＋白石学＋江津匡士著『**かたち・色・レイアウト　手で学ぶデザインリテラシー**』（Ｂ５判変型・四色刷一二〇頁・二八〇〇円）

　デザインの基礎となる読み書きの能力を「デザインリテラシー」という。ムサビのデザイン情報学科一年生は、入学早々、四週間にわたり、その集中授業を受ける。美大には珍しく、平面構成やデッサン経験のない学生が約半数を占めているこの学科では、ここで初めて烏口（からすぐち）を手にする学生もいる。

　人はどのように形態を把握するのか、なぜ奥行きを感じるのか、色とは何か、色を表す方法とは、配置（レイアウト）の極意とは…人間の知覚が普遍であることを一五のLecture（講義）によりまずは頭で理解し、次に錯視図形から名刺レイアウトまで一〇のExercise（課題）に挑む。サブタイトルにあるとおり課題はパソコンに頼らず、手作業でとり組まねばならない。そのためのAdviceも満載。

　視覚のしくみからデザインを体得し、デザインの基礎体力を身に付ける名物授業の書籍化！

明星大学出版部

▼明星大学教職センター編『**教員を目指す君たちに受けさせたい面接試験対策講座―教員になる覚悟を持つ**』（Ａ５判・二五〇頁・一九五〇円）面接対策とは、教員を目指した原点に立ち返ることである。志を語れる者に教員の道が拓ける。

▼樋口修資・吉冨芳正・林一夫共著『**教育の最新事情**』（Ａ４判・一九六頁・二三〇〇円）教育現場の喫緊の課題を一五のテーマに沿って解説する。

▼樋口修資著『**教育委員会制度変容過程の政治力学**』（Ａ５判上製・三〇〇頁・三二〇〇円）占領下に制度化された教育委員会の意義と性格は独立回復後どのように変質したか。戦後改革における教育法規制定の位相と変遷を検証。

▼渡邉時夫・佐藤令子・粕谷恭子著『**これから始めよう　小学校英語―楽しい指導の第１歩**』（Ｂ５判・一六八頁・一二〇〇円）英語によるコミュニケーション能力の素地とは何か、それを築くための望ましい指導法は何か。早期英語教育の研究、小学校英語教育の実践活動、英語教員養成の仕事に携わってきた三名による教育法・指導法入門。

早稲田大学出版部

▼平田竹男・河合純一・荒井秀樹編著『**パラリンピックを学ぶ**』（A5判・二二四頁・一五〇〇円）パラリンピックの歴史、競技の特殊性、選手の競技環境、選手を支える人々、パラリンピックをめぐるメディアの役割など、これ一冊でパラリンピックのすべてを理解できる日本初のパラリンピックテキスト。早大人気講義の書籍化。

▼縣公一郎・藤井浩司著『**ダイバーシティ時代の行政学**』（A5判・三五〇頁・三五〇〇円）格差を生み出してきた効率性に偏った社会から脱し、現代の日本社会を多様な価値からなる社会に再生するために、行政は政治と社会との間でどのような役割を担うべきか。気鋭の研究者たちによる論文集。

関東学院大学出版会

▼関東学院大学経済学部経済学科編『**スタディガイド　はじめて学ぶ経済学**』（A5判・一三六頁・一七〇〇円）本書は、経済史からの歴史的アプローチとミクロ・マクロ経済理論による理論的アプローチの両面から経済学の全体像をとらえようとしたユニークな経済学入門書。

▼関東学院大学経済学部経営学科編『**はじめて学ぶ経営学**』（A5判・九〇頁・一五〇〇円）初学者が企業経営や経営学をおもしろく感じることができるように、内容を絞り、専門用語をわかりやすく解説、企業経営を具体的にイメージできるコラムや図表をとりいれた特色あるテキスト。

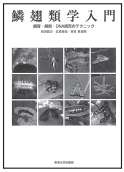
▼関東学院大学人間共生学部コミュニケーション学科編『**コミュニケーション入門―人間共生時代におけるコミュニケーション**』（A5判・一八四頁・一七〇〇円）現代のコミュニケーションには、社会の変化によって大きく変化した部分と、従来から変わらない部分がある。本書はメディア、ビジネス心理、グローバルの三つの側面から共生時代のコミュニケーションを考える。

東海大学出版部

▼植竹淳著『**雪と氷の世界を旅して―氷河の微生物から環境変動を探る**』（B6判・二一〇頁・二〇〇〇円）フィールドの生物学シリーズ⑲雪氷中の微生物が巨大な氷河を融かす？その謎を解き明かす。

▼柴正博著『**はじめての古生物学**』（A5変型判・二〇〇頁・二三〇〇円）過去に堆積した地層から発見された化石から、過去の生物を研究する古生物学をはじめて学ぶ人のための本。

▼那須義次他編著『**鱗翅類学入門―飼育・解剖・DNA研究のテクニック**』（A5判・三〇八頁・四八〇〇円）生態学、進化学的研究等を行う上で必要な採集、標本作製、解剖、形態観察、DNA研究他を鱗翅類を通して解説する昆虫研究の入門書。



名古屋大学出版会

▼天野郁夫著『**新制大学の誕生―大衆高等教育への道**』上・下（A5判・三七二頁／四一四頁・各三六〇〇円）終戦後の混乱を経て、大転換を果たした日本の大学制度。関係者の交渉記録から、新たな出発までの困難な過程を辿り、現代のマス高等教育の原点を明らかにする。

▼三好信浩著『**日本の産業教育―歴史からの展望**』（A5判・三九六頁・五五〇〇円）「役に立つ」教育を、歴史の中から問い直す。近代産業教育の歩みを、女子教育や地方の観点も含め一望。現代の産業社会が抱える課題への提言を行う。

▼カピル・ラジ著／水谷智他訳『**近代科学のリロケーション―南アジアとヨーロッパにおける知の循環と構築**』（A5判・三一六頁・五四〇〇円）植民地のアクターに注目し、間文化的な移動・循環のなかで科学が共同構築される現場を描く。

▼シェイピン&シャッファー著／吉本秀之監訳『**リヴァイアサンと空気ポンプ―ホッブズ、ボイル、実験的生活**』（A5判・四五四頁・五八〇〇円）実験は信頼できるのか。実験科学の形成を、当時の政治的・思想的文脈の中で捉え直した名著。

三重大学出版会

▼松岡裕之編『**衛生動物学の進歩　第2集**』（四六判・三五九頁・六〇〇〇円）「衛生動物学の進歩 第1集」が出版されたのは一九七一年。その後四五年を経て科学は飛躍的という言葉では表わせないほど発展した。衛生動物学の分野もまた同様である。本書は現在その分野で第一線にあって研究を進めている秀英らによって、その膨大な全容が概説されている。

▼冨田達也・冨田江一著『**水素核融合に向けての基礎的諸問題**』（四六判・八五頁・四五〇〇円）核融合は、原子力発電を実用化した技術力で克服可能と考えられ、反応開始温度を徐々に高く設定するなど、様々な努力が試みられてきましたが、まだ成功には至っていません。温度を上昇させても、核融合の開始が認められないということは、温度の問題以外の他の要因を考える必要があるのかもしれません。そこで、本書では、熱核融合の基礎となる理論をもう一度問い直すことによって、この問題を考えます。

京都大学学術出版会

▼デイビッド・L・カーチマン著、永田俊訳『**微生物生態学―ゲノム解析からエコシステムまで**』（A5判・六四八頁・五三〇〇円）地球上で最も数が多く、多様性にあふれる微生物の世界を、彼らが関わる〝プロセス〟を軸に体系化。陸域・水域の主要な微生物グループを網羅し、鍵となる微生物代謝や群集動態、環境影響を解説した決定版。

▼中尾一和編『**京都大学健康市民講座Q&A生活習慣病の科学Neo**』（A5判・三六〇頁・予価一九〇〇円）世界的に診断基準や治療法が大きく変わった新時代の生活習慣病対策。最新の知見と技術に基づく予防法から診断・治療法まで、市民の疑問に大学病院の現場から明快に回答する。好評Q&Aの最新版。

▼山登義明著『**ドキュメンタリーを作る2・0―スマホ時代の映像制作**』（A5判・二四六頁・二二〇〇円）誰もが映像技術を手にする時代に、今の、何をどう切り取るか。企画・取材・撮影技術からメディア論まで、練達のTVプロデューサーが、市民のためのハイクオリティの映像作りを伝授する。

大阪経済法科大学出版部

今回は既刊書から環山楼市民塾の講演記録集『**未来を発信する八尾・環山楼市民塾**』各三冊の主要目次を紹介します。

▼『**環山楼市民塾二〇〇九**』世界経済と日本経済を俯瞰する（本間正明）／文化遺産学のたのしさ（高橋隆博）／ごみ問題の経済評価とまちづくり（坂田裕輔）／ものづくりと産業組織論（箱田昌平）／国際的労働力移動（村下博）／ＩＴの進化と現代経営の基本問題（能塚正義）／⑥日本における特許法の歴史のあらまし（岩村等）／活性化する東北アジアの現状と将来の展望（藤本和貴夫）▼『**環山楼市民塾二〇一〇**』激動する世界と日本経済の活路（本間正明）／今、求められるリーダー像（関淳）／宇宙ビジネス（河島信樹）／地域の環境政策を考える（坂田裕輔）／現代社会と企業の社会的責任（能塚正義）／東アジアにおける日本の道（藤本和貴夫）▼『**環山楼市民塾二〇一一**』日本経済の現状と展望（本間正明）／レーザーの医療応用（河島信樹）／「地域市民塾の可能性」（初谷勇）／高度情報化社会に生きる（能塚正義）／ＥＵと「東アジア共同体」（藤本和貴夫）

大阪大学出版会

▼安井倫子著『**語られなかったアメリカ市民権運動史―アファーマティブ・アクションという切り札**』（Ａ５判・二五八頁・四五〇〇円）国民の境界線を再編する「諸刃の剣」としての統合と分断の歴史を黒人労働者、労働組合の動向に焦点を当てて検証し、アメリカ人種問題の解決への糸口を探る。

▼大槻文藏監修・天野文雄編集『**世阿弥を学び、世阿弥に学ぶ**』（四六判・三一八頁・二三〇〇円）世阿弥生誕六五〇年を記念して大槻能楽堂で行われた講演や対談から、世阿弥にかかわるものを採録。世阿弥とその作品について、専門家による最新の知見が盛り込まれた貴重な講演とトーク集。

▼武田佐知子・津田大輔著『**礼服（らいふく）―天皇即位儀礼や元旦の儀の花の装い**』（Ａ５判・四七二頁・三九〇〇円）即位儀礼と元旦の儀に歴代の天皇と臣下がまとった失われた最高礼装、礼服（らいふく）とは。礼服の意義と変相するドレスコード。

関西大学出版部

▼シャーリー・クラーク著・安藤輝次訳『**アクティブラーニングのための学習評価法―形成的アセスメントの実践的方法**』（Ａ５判・二三六頁・四〇〇〇円）アクティブラーニング＋学習評価＝深く思考・判断する学習。教師だけでなく子どもアクティブラーニングの評価に関わることによって、思考・判断が深まる。そのポイントは、このような学びになればよいという「成功規準」を子どもと一緒に創ること。そうすれば、小集団やペアなど子ども同士の学びと評価もうまくいく。

▼陶徳民編著『**吉田松陰と佐久間象山―開国初期の海外事情探索者たち（一）**』（Ａ４判・二八八頁・四三〇〇円）下田密航事件をめぐる松陰の義勇、象山の智謀とペリーの仁愛。幕府の『墨夷応接録』、米日和親条約と羅森「日本日記」、松陰自筆の『海国図志』抄録・「投夷書」と下田獄中の嘆願書、象山の『省けん録』およびペリーの航海日誌中の松陰乗船記録など、「その時心が動いた」瞬間をキャッチした第一級の文字史料と画像の数々を網羅する入魂の力作。

関西学院大学出版会

▼石原俊彦・山之内稔著『**自治体病院経営の基礎**』（A5判・一九六頁・二八〇〇円）病院にはじめて勤務する事務職員、病院幹部や医療スタッフを対象に自治体病院が抱える課題について1部エピソード編としてまとめ、2部で病院経営に必要な基礎知識を解説することで課題を解くヒントを提供。

▼関根康正・根本達・志賀浄邦・鈴木晋介著『**社会苦に挑む南アジアの仏教―B・R・アンベードカルと佐々井秀嶺による不可触民解放闘争**』（A5判・九二頁・一二〇〇円）不可触民解放の騎手アンベードカルの思想と運動。その意思に感銘しエンゲイジド・ブッディズムを実践する佐々井秀嶺。仏教学と人類学の研究者がこの二人に学び差別脱却を協働で実践的に探求。

▼杉浦司著『**戦略マネジメント―激動の時代を生き抜くためのスピード経営**』（A5判・一八八頁・二〇〇〇円）トップマネジメントにおける経営者の戦略アイデアを現実成果としてのイノベーションにまで紡いでいくためのプロセスを提示する。

広島大学出版会

▼安村誠司、神谷研二共編『**Public Health in a Nuclear Disaster : Message from Fukushima**』（B5判・四六〇頁・五三〇〇円）東日本大震災により福島県では、地震・津波のみならず、その後の東京電力福島第一原子力発電所事故による放射線の問題に直面せざるを得ない状況に追い込まれた。本書は、原発事故後約一年半までの間に福島県で行われた国、県、全保健所、避難区域になった十三市町村を含めた全市町村、各種職能団体等の公衆衛生活動の記録である。また、原発事故直後から復興支援を開始した広島大学による取組みについても概説するとともに、過去の歴史に例のない原子力災害を受け、人々の健康を守り負の経験を生かすための提言が述べられている。安村誠司編『原子力災害の公衆衛生―福島からの発信―』（南山堂、二〇一四）を英訳するとともに、新たに広島大学による取組みの章を加えたものである。（全編英文）◆主要目次◆原子力災害とは（原発事故の概要、医療対応、放射線の健康影響）／行政の対応／各種職能団体の活動／広島大学の取組み／提言

九州大学出版会

▼笹栗俊之著『**患者さんと医療系学生のための臨床薬理学入門―くすりを正しく用いるために**』（A5判・一七四頁・二〇〇〇円）チーム医療の一員である患者が主体的に治療計画に参加し、納得できる治療方法を自ら選択するための手引きとしても役立つ入門書。

▼森邦昭著『**ディルタイから教育実践へ―アクティブラーニングの源流**』（A5判・三六四頁・五二〇〇円）学級崩壊、学力低下など教育現場の課題に精神科学の視点から突破口を探る。教室の子どもたちを能動的に学習させる授業法のヒントがここに。

▼木下謙治監修／園井ゆり・浅利宙編『**第3版 家族社会学―基礎と応用**』（A5判・二二四頁・二〇〇〇円）家族を理解するための基礎概念を解説したうえで、結婚の多様化・生殖補助医療・少子化と子育て・青少年問題・高齢者介護・虐待・養子縁組など、家族の変容を論じ、現代の家族問題の構造と対応策を考察する。好評テキストの第3版。

一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

【50音順】2016年7月1日現在

㈱朝日新聞社	〒104-8011	東京都中央区築地5-3-2	TEL 03-5540-7749
亜細亜印刷㈱	〒380-0804	長野県長野市大字三輪荒屋1154	TEL 026-243-4858
㈱アベル社	〒162-0825	東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408	TEL 03-3235-1360
尼崎印刷㈱	〒661-0975	兵庫県尼崎市下坂部3-9-20	TEL 06-6494-1122
㈱ALE	〒103-0023	東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階	TEL 03-5652-8627
王子製紙㈱	〒104-0061	東京都中央区銀座4-7-5	TEL 03-3563-7072
岡本出版発送㈱	〒353-0001	埼玉県志木市上宗岡3-16-2	TEL 048-471-6291
カクタス・コミュニケーションズ㈱	〒101-0061	東京都千代田区三崎町2-4-1 TUG-Iビル4F	TEL 03-6261-2290
㈱加藤文明社印刷所	〒101-0061	東京都千代田区三崎町2-15-6 K-STAGE	TEL 03-3261-8281
城島印刷㈱	〒810-0012	福岡県福岡市中央区白金2-9-6	TEL 092-531-7102
㈱紀伊國屋書店	〒153-8504	東京都目黒区下目黒3-7-10	TEL 03-6910-0510
㈱クイックス	〒456-0004	愛知県名古屋市熱田区桜田町19-20	TEL 052-871-9190
㈱粂川印刷	〒112-0012	東京都文京区大塚6-9-7	TEL 03-3943-9811
㈱クリムゾンインタラクティブジャパン	〒101-0021	東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F	TEL 03-3525-8001
港北出版印刷㈱	〒150-0002	東京都渋谷区渋谷2-7-7	TEL 03-5466-2201
三松堂印刷㈱	〒101-0065	東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階	TEL 03-6823-5360
三美印刷㈱	〒116-0013	東京都荒川区西日暮里5-9-8	TEL 03-3803-3131
三立工芸㈱	〒101-0061	東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F	TEL 03-3261-5171
三和印刷㈱	〒381-2226	長野県長野市川中島町今井1822-1	TEL 026-285-2300
信濃印刷㈱	〒102-0072	東京都千代田区飯田橋4-1-11	TEL 03-3237-3601
㈱渋谷文泉閣	〒380-0804	長野県長野市三輪荒屋1196-7	TEL 026-244-7185
㈱眞興社	〒150-0033	東京都渋谷区猿楽町19-2	TEL 03-3462-1181
新日本印刷㈱	〒162-0801	東京都新宿区山吹町342	TEL 03-3269-3611
㈱精興社	〒101-0054	東京都千代田区神田錦町3-9	TEL 03-3293-3021
創栄図書印刷㈱	〒604-0812	京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766	TEL 075-255-2288
大同印刷㈱	〒849-0902	佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20	TEL 0952-71-8550
ダイニック㈱	〒105-0004	東京都港区新橋6-17-19 御成門ビル	TEL 03-5402-1811
㈱太平印刷社	〒140-0002	東京都品川区東品川1-6-16	TEL 03-3474-2821
㈱太洋社	〒501-0431	岐阜県本巣郡北方町北方148-1	TEL 058-324-2111
寶紙業㈱	〒102-0072	東京都千代田区飯田橋3-7-14	TEL 03-3261-5335
㈱竹尾	〒101-0054	東京都千代田区神田錦町3-12-6	TEL 03-3292-3617
㈱東京弘報社	〒101-0051	東京都千代田区神田神保町1-34	TEL 03-3291-1771
㈱とうこう・あい	〒104-0061	東京都中央区銀座8-11-11	TEL 03-3571-6000
東光整版印刷㈱	〒135-0006	東京都江東区常盤2-12-15	TEL 03-3632-0801
㈱トーヨー企画	〒602-0923	京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7	TEL 075-411-8288
図書印刷㈱	〒114-0001	東京都北区東十条3-10-36	TEL 03-5843-9700
㈱日新広告社	〒101-0061	東京都千代田区三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F	TEL 03-3263-9431
㈱日本経済新聞社	〒100-8066	東京都千代田区大手町1-3-7	TEL 03-5255-2198
萩原印刷㈱	〒112-0004	東京都文京区後楽2-21-12	TEL 03-3811-4272
㈱博報堂	〒107-6322	東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F	TEL 03-6441-6711
藤原印刷㈱	〒101-0052	東京都千代田区神田小川町2-4-5	TEL 03-3291-0191
㈱平文社	〒170-0005	東京都豊島区南大塚2-35-7	TEL 03-3944-0301
㈱堀内印刷所	〒335-0034	埼玉県戸田市笹目3-11-5	TEL 048-422-0029
㈱毎日新聞社	〒100-8051	東京都千代田区一ツ橋1-1-1	TEL 03-3212-3340
誠製本㈱	〒174-0042	東京都板橋区東坂下1-19-5	TEL 03-3967-3952
㈱遊文舎	〒532-0012	大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31	TEL 06-6304-9325
㈱読売新聞東京本社	〒100-8055	東京都千代田区大手町1-7-1	TEL 03-3242-1111
㈱ライトコミュニケーション	〒101-0035	東京都千代田区神田紺屋町11 岩田ビル5F	TEL 03-3251-7571
渡辺印刷㈱	〒152-0031	東京都目黒区中根2-7-1	TEL 03-3718-2161

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同下さり、ご支援頂いている各社様をご紹介させていただきます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

大学出版部協会・ブックレット

大学出版部協会 発行／東京大学出版会 発売【2014年6月刊】

2013年6月から4回にわたり開催された大学出版部協会創立50周年記念連続シンポジウム「新しい社会を拓く大学の力」の成果より、2点をブックレット化しました。　日本生命財団学術書出版助成図書

座小田豊　ざこたゆたか（東北大学大学院文学研究科教授）
田中克　たなかまさる（京都大学名誉教授）
川崎一朗　かわさきいちろう（京都大学名誉教授）

防災と復興の知　3・11以後を生きる

A5 判・80 頁／定価（本体 1,000 円＋税）ISBN978-4-13-003150-9

列島沿岸を巨大堤防で覆う？――これまで通りの高度技術をふりかざすだけで、はたして本当に強靭な社会をつくることができるのか。哲学・生態学・地震学による対話を通して、自然と社会を千年の単位で見直し、再生のための知のあり方を探る。

〈主要目次〉
第一章「ふるさと」の根源的な力と想像力の可能性（座小田豊）／第二章　森里海の連環から震災と防災を考える（田中克）／第三章　災害社会――本当に強い社会とは（川崎一朗）／終章「ふるさと」から「ふるさと」へ（座小田豊）

中村哲之　なかむらのりゆき（東洋学園大学人間科学部専任講師）
渡辺茂　わたなべしげる（慶應義塾大学名誉教授）
開一夫　ひらきかずお（東京大学大学院総合文化研究科教授）
藤田和生　ふじたかずお（京都大学大学院文学研究科教授）

心の多様性　脳は世界をいかに捉えているか

A5 判・80 頁／定価（本体 1,000 円＋税）ISBN978-4-13-003151-6

トリ、ヒト、それぞれが視る世界は同じものではない。赤ちゃんはいつごろから自分を自分と認識するのか。心の働きの多様性を比較認知科学・発達認知科学の視点からわかりやすく解き明かす。

〈主要目次〉
第一章　トリの「視る」世界――動物の錯視と心（中村哲之）／第二章　ヒト型脳とハト型脳（渡辺茂）／第三章　脳は世界をいかに捉えているか（開一夫）／第四章　討論――心の多様性と現代（藤田和生×中村哲之・渡辺茂・開一夫）／あとがき（藤田和生）

ナチュラルヒストリーの時間

大学出版部協会編　A5判／160頁／定価（本体1,600円＋税）

自然史へ誘う：博物誌から生態学、多様性生物学、ゲノムサイエンス、そして21世紀のナチュラルヒストリーを愉しむ

I. Prologue of Natural History

第１話　自然を記録すること……斎藤靖二

第２話　自然史と本……青木淳一

第３話　日本のナチュラルヒストリー……岩槻邦男

コラム①　動物写真の世界

II. History of Nature

第４話　ノーチラス号が遭遇した大ダコ……奥谷喬司

第５話　マリー・ストープスの２つの顔：日本の植物化石研究事始め……矢島道子

第６話　京都の語り部：深泥池……竹門康弘

第７話　遺跡の土に秘められた情報……松井　章

コラム②　ききみみずきん

第８話　遺体で動物学を埋め尽くす……遠藤秀紀

第９話　ダーウィンと魚類学：人々と時代と魚たち……武藤文人

第10話　日本の小鳥飼育文化と鳴き合わせ……小山幸子

III. Diversity of Nature

第11話　サクラソウとマルハナバチ……鷲谷いづみ

第12話　日本列島に人間と野生動物との共生の歴史をさぐる……湯本貴和

第13話　琉球列島の自然史……太田英利

第14話　マンボウと標本……松浦啓一

第15話　分類学事始め：タクソン，タイプ，名前……馬渡駿輔

コラム③　サルにノミはいない？　幻の定説

IV. Story of Nature

第16話　クマ大量出没の謎……大井　徹

第17話　ふしぎの国のアリ巣……丸山宗利

第18話　現代によみがえったインカ時代の狩猟……山本紀夫

第19話　子どもたちと自然教室：干潟で役立つ本や教材……古賀庸憲

第20話　熱帯雨林の林冠アリ……市岡孝朗

第21話　殿様の自然史……松岡明子

第22話　幻のロバと男たち……木村李花子

第23話　食の博物誌：多民族国家のハイ・ティー……周　達生

コラム④　アリジゴクの自然史

V. Epilogue of Natural History

第24話　遺伝子を通した動物との対話……村山美穂

第25話　ゲノム時代のナチュラルヒストリー……西田　睦

コラム⑤　小・中学校図書館は今

特別寄稿：「具体的な人間の日常性」と抽象化された「専門性・科学性」……久塚純一

自然史文献リスト

7net shopping セブンネットショッピング

おすすめポイント❶

専門書など約150万点の品揃え

おすすめポイント❷

全国のセブン-イレブンで、※ 24時間受取れて、送料0円

ネットで注文

店舗で受取り

nanaco（ナナコ）ポイントも貯まってお得！

※一部サービスを実施していない店舗や24時間営業ではない店がございます

http://7net.omni7.jp　セブンネット　検索

名古屋外国語大学出版会の本！

留学と日本人

最澄・空海から明治維新、ノーベル賞受賞者まで…。なぜ彼らは海を渡ったのか!?

丹羽健夫 著

A5判 88頁 800円＋税

魯迅後期試探

魯迅没後80年の記念の年。わが国の魯迅研究の第一人者による決定的研究・集大成。

中井政喜 著

A5判ハードカバー 440頁 6500円＋税

協同学習で物語を読む

アクティブラーニングをリーディング授業に！ コミュニケーション能力を高める、学習者主体のリーディング授業を行うための鍵。

新居明子 著

B5判 104頁 1300円＋税

名古屋外国語大学出版会
Nagoya University of Foreign Studies Press
〒470-0197 愛知県日進市岩崎町竹ノ山57番地
TEL 0561-74-1111 FAX 0561-75-1723
http://www.nufs.ac.jp/
（丸善雄松堂株式会社・発売）

多文化社会読本

多様なる世界、多様なる日本

長谷部美佳　受田宏之　青山亨 編

多言語・多文化化する現代社会。世界14か国に及ぶ現場での経験を活かし、地域研究と移民研究の成果から国家と社会の新しい関係性を探求する。　2400円＋税

移動するカレン族の民族誌　フロンティアの終焉

吉松久美子 著

北部タイ山間盆地で頻繁に家や村を移していた頃のカレン族の人々の生活を記述し、移動するカレン族の文化の終焉を鮮やかに捉えたエスノグラフィー。3700円＋税

日本をたどりなおす29の方法　国際日本研究入門

野本京子　坂本惠
東京外国語大学国際日本研究センター 編

「日本人の宗教観」「日本国憲法」「3・11 後の暮らし」など、多様な視点で描く「日本」――。国際日本研究、上級日本語学習のための新しい教科書。　2000円＋税

東京外国語大学出版会
Tokyo University of Foreign Studies Press
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1　TEL：042-330-5559
URL：www.tufs.ac.jp/blog/tufspub/

東京学芸大学出版会

街の木ウォッチング

――オモシロ樹木に会いにゆこう

岩谷美苗 著

私たちの身近にある木々から、樹木医の著者がとびっきりユニークな樹木を選び、独自のネーミングでその形や現象をわかりやすく解説する“目からウロコ”の自然交際術

A5変型判　160頁　1500円＋税

社会の危機から地域再生へ

――アクティブ・ラーニングを深める社会科教育

坂井俊樹 編

現代社会のさまざまな危機を克服し、地域の再生に役立てるための社会科の具体的な授業例を示した。　A5判　230頁　2200円＋税

杜牧研究

――杜牧における政治と文学

高橋未来 著

優れた晩唐の詩人であり、官僚でもあった杜牧の実像に迫り、杜牧文学の本質を解き明かす。

A5判　324頁　2600円＋税

GIP
[TEL] 042-329-7797　[FAX] 042-329-7798
[HP] http://www.u-gakugei.ac.jp~upress

－筑波大学の知の発信－
筑波大学出版会
http://www.press.tsukuba.ac.jp/

破壊と再生の歴史・人類学

自然・災害・戦争の記憶から学ぶ

伊藤 純郎・山澤 学 編著

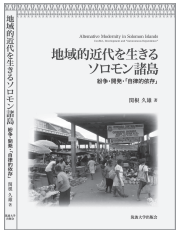
A5判 2800円＋税
ISBN978-4-904074-41-1

地域的近代を生きるソロモン諸島

紛争・開発・「自律的依存」

関根 久雄 著

A5判　3,400円＋税
ISBN978-4-904074-37-4



発売：丸善出版株式会社
TEL:03-3512-3256
FAX:03-3512-3270
http://pub.maruzen.co.jp/

（提供：ミームデザイン学校）

表紙写真：ミームデザイン学校の授業より

ミームデザイン学校は、週末を利用して、ブックデザインやグラフィックデザインの理念と実技を学習する教育機関である（代表：中垣信夫）。写真は、タイポグラフィへの理解を深めるための実習授業の様子。

大学出版108号（2016年秋）
2016年10月1日発行
頒価100円（〒共）

発行所：一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北1丁目14番13号
メゾン萬六403号室
TEL 03-3511-2091　FAX 03-3511-2092
E-mail：mail@ajup-net.com
URL：http://www.ajup-net.com/

表紙デザイン：阿部卓也

一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覧

■ 北海道大学出版会
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308　FAX 011-736-8605

■ 弘前大学出版会
〒036-8560 弘前市文京町1番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168　FAX 0172-39-3171

■ 東北大学出版会
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777　FAX 022-214-2778

■ 流通経済大学出版会
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-60-1167　FAX 0297-60-1165

■ 聖学院大学出版会
〒362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL 048-725-9801　FAX 048-725-0324

■ 聖徳大学出版会
〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111　FAX 047-363-1401

■ 麗澤大学出版会
〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 04-7173-3331　FAX 04-7173-3154

■ 慶應義塾大学出版会
〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168　FAX 03-3451-3124

■ 専修大学出版局
〒101-0051 千代田区神田神保町3-10-3
TEL 03-3263-4230　FAX 03-3263-4288

■ 大正大学出版会
〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1
TEL 03-3918-7311　FAX 03-5394-3038

■ 玉川大学出版部
〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935　FAX 042-739-8940

■ 中央大学出版部
〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351　FAX 042-674-2354

■ 東京大学出版会
〒153-0041 目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069　FAX 03-6407-1991

■ 東京電機大学出版局
〒101-0047 千代田区内神田1-14-8
TEL 03-5280-3433　FAX 03-5280-3563

■ 法政大学出版局
〒102-0073 千代田区九段北3-2-3
法政大学九段校舎内
TEL 03-5214-5540　FAX 03-5214-5542

■ 武蔵野大学出版会
〒202-8585 西東京市新町1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003　FAX 042-468-3004

■ 武蔵野美術大学出版局
〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810　FAX 0422-22-8309

■ 明星大学出版部
〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979　FAX 042-593-0192

■ 早稲田大学出版部
〒169-0051 新宿区西早稲田1-9-12
TEL 03-3203-1551　FAX 03-3207-0406

■ 関東学院大学出版会
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-5906　FAX 045-785-9572

■ 東海大学出版部
〒259-1292 平塚市北金目4-1-1
TEL 0463-58-7820　FAX 0463-58-7833

■ 名古屋大学出版会
〒464-0814 名古屋市千種区不老町1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027　FAX 052-781-0697

■ 三重大学出版会
〒514-8507 津市栗真町屋町1577
三重大学総合研究棟Ⅱ 3階
TEL 059-232-1356　FAX 059-253-3095

■ 京都大学学術出版会
〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182　FAX 075-761-6190

■ 大阪経済法科大学出版部
〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-9129　FAX 072-941-9979

■ 大阪大学出版会
〒565-0871 吹田市山田丘2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614　FAX 06-6877-1617

■ 関西大学出版部
〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-0238　FAX 06-6389-5162

■ 関西学院大学出版会
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-7002　FAX 0798-53-9592

■ 広島大学出版会
〒739-8512 東広島市鏡山1-2-2
TEL 082-424-6226　FAX 082-424-6211

■ 九州大学出版会
〒814-0001 福岡市早良区百道浜3-8-34
九州大学産学官連携イノベーションプラザ305
TEL 092-833-9150　FAX 092-833-9160

■ 東京農業大学出版会（休会）
〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL 03-5477-2666　FAX 03-5477-2747